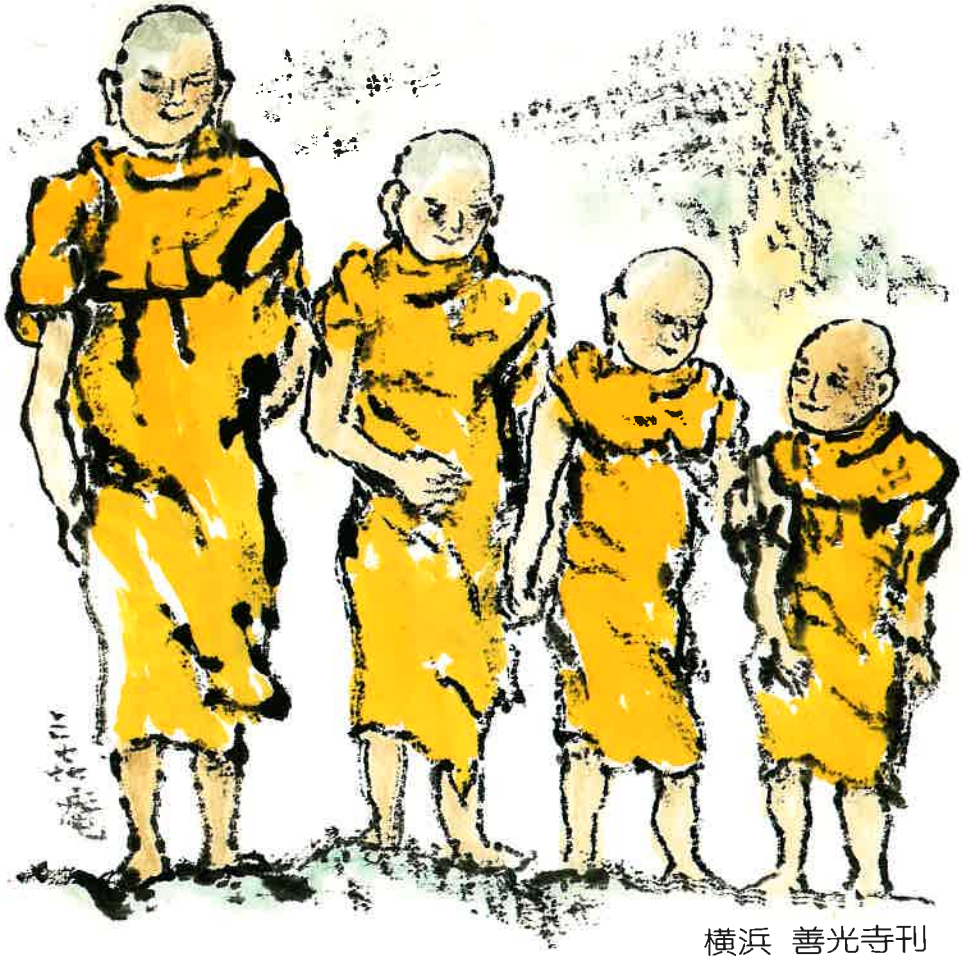
第 10 巻

成寿

SEIJU

1988 夏秀号



横浜 善光寺刊

拝啓 初夏の候皆様には御健勝に
お過ごしのこと存じます
第毒 第十号をお届け致します
今回は各方面から称讃のお言葉を
いただきました上、愛読者(弟子)による
追悼式を特集致しました その
模様を誌面にてお読み頂いた
ければ幸いに存じます まずは
取急ぎながら御報告まで申上げて
挨拶致します

令嬢

昭和二十三年六月吉日

[illegible]

墨田武志
(大関)

各位

道行

これぞ　ひとの
知見を浄むるの道
かかるほかには道なし
爾ら
この道をすすむべし
この道は
誘惑者を
やぶるものなり

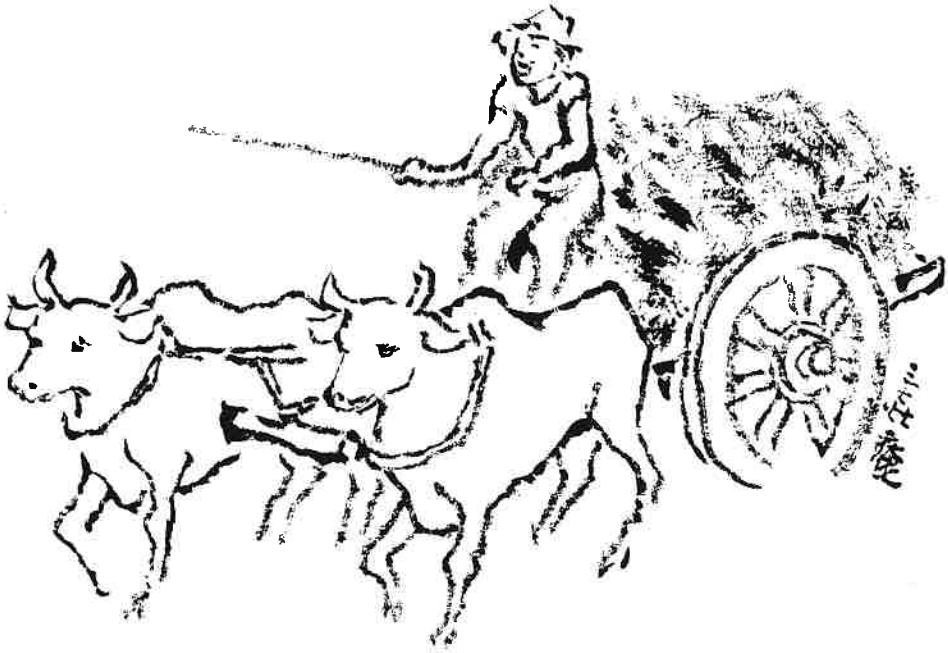
〈法句経〉

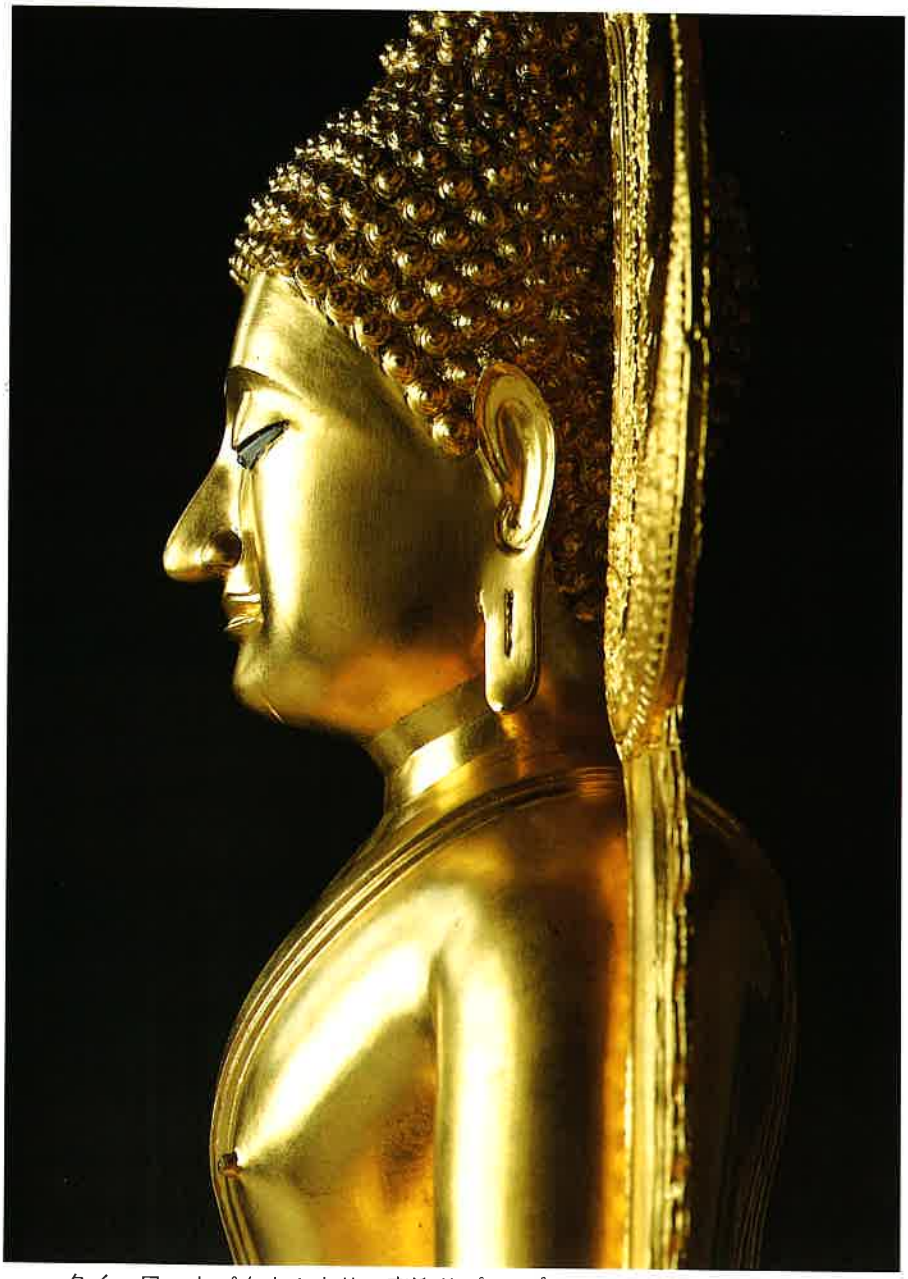
第 10 巻

成寿

SEIJU

1988 夏秀号





タイ　ワットパクナムよりの奉迎仏プラ・プッタ・チナラート

งคลเทพมุนี (หลวงพ่อวัดปากน้ำ)
และ บรรจุพระเบญจรงค์ธาตุ
สมโภชหนึ่งร้อยปี พระพุทธคลเทพมุนี (หลวงพ่อวัดปากน้ำ)

上座部得度式を終えて

日本の仏教は多くの宗派に分かれ、その説くところは異なり、互いに反目し合う一面も見られ、どれが釈尊の正しい教えなのか？これは私が若い頃はじめて仏教に接したときの率直な疑問でした。そこで私は「宗祖を通して釈尊に還る」ということを私の宗教活動の基盤としました。本山修行を終えて直ちにインド仏蹟参拝に出かけたのも、帰途タイに立寄って一年有余修行したのもそのためであります。さらに五十七年に建立した建物を本堂といわず、あえて「釈迦殿」と称したのも、また宗派の如何を問わず有数の人材を海外に派遣しているのもそのためであります。

さて、タイ国にはかつて私が修行したワット・パクナムに留学僧を出しておりますが、昨年同寺に参上した折、住職から、

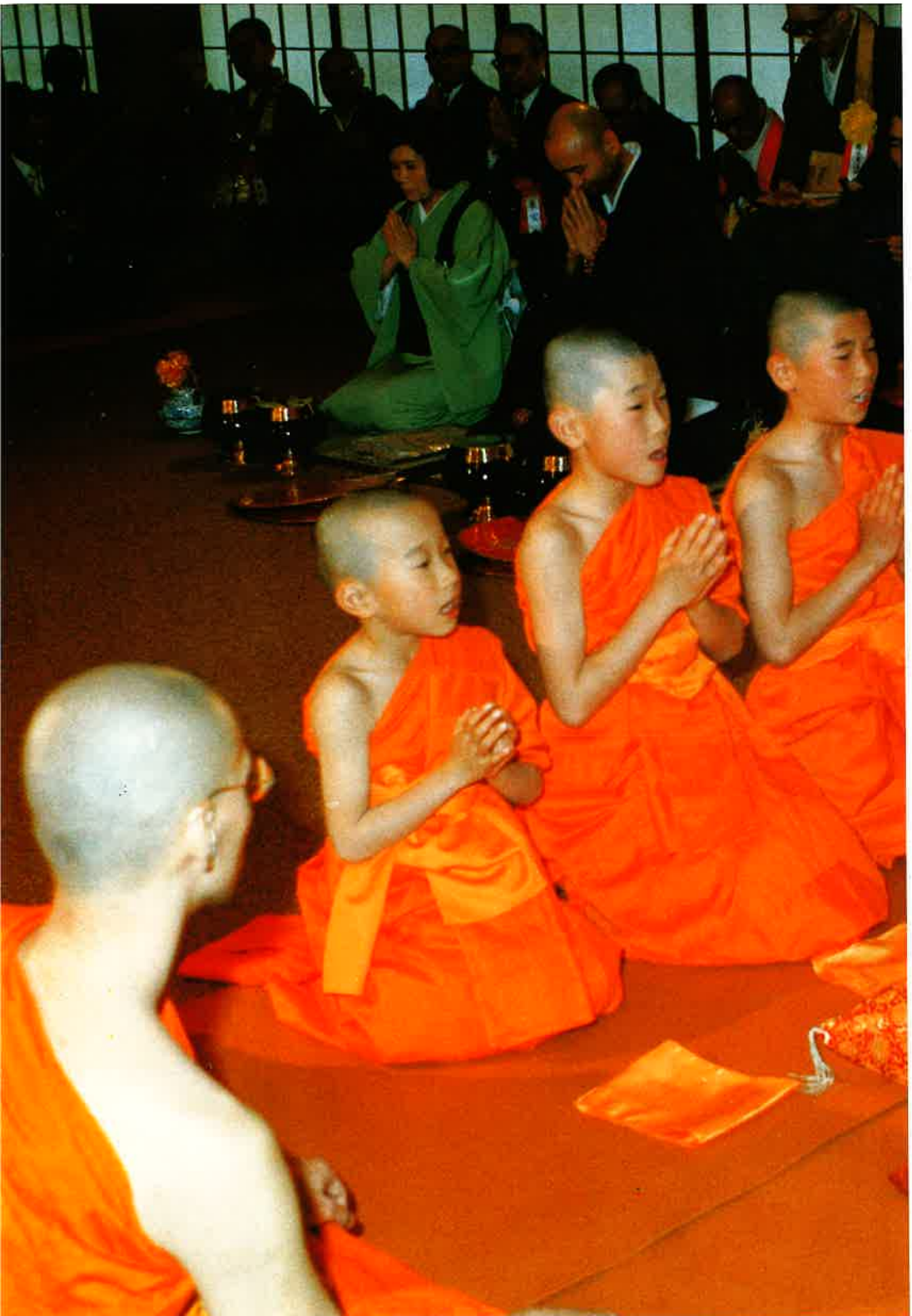
「ぜひ日本で得度式を挙げたい。いま日本・タイ仏教の交流をはかるために、あなたの協力で実現できないものか」と強く要望されました。この要請によって実現したのが去る四月二日の、私の四人の息子の得度式であります。

『宗教と現代』誌に東隆真博士は、

〝タイ国の高僧が日本に出かけて戒師となり、日本人のために授戒したということは、おそらく、中国の高僧、鑑真和上が東大寺戒壇院を建て、日本人僧に授戒して以来のことではあるまいか。ここに日本・タイ両国の仏教史（戒律史）上、新しい一ページが書き加えられることになった。〟

と述べて下さっています。

大乗仏教と南方（上座部）仏教の交流のいしづえとなるべく法縁に支えられ、一段の精進をと深く心に誓っております。



特集／タイ法式による得度式

四月二日

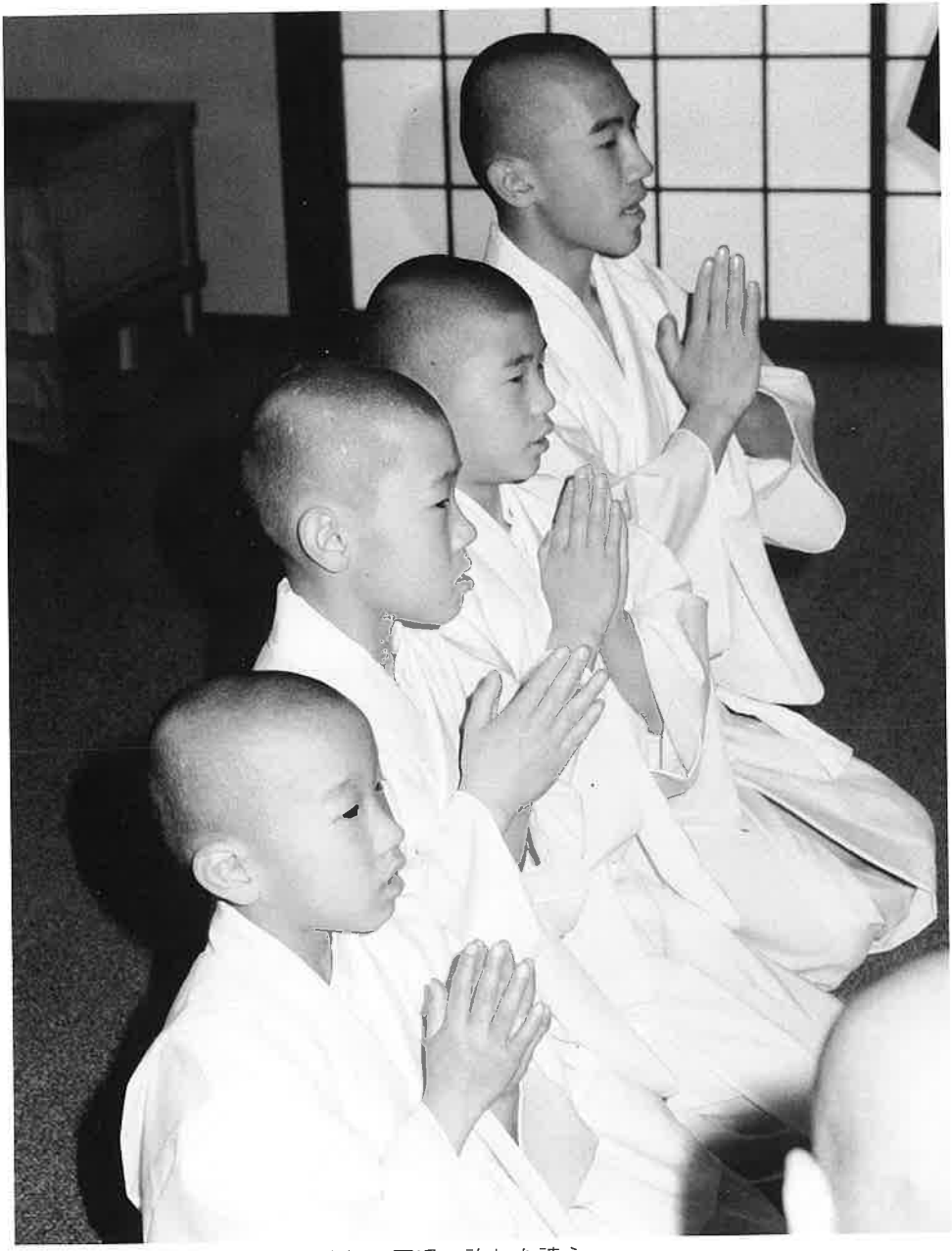
日本で初めてとりおこなわれる、タイ仏教のウパサンパダ（得度式）を前に、全山に緊張が漲っていた。

当山住職とは深いご縁で結ばれているタイ国・ワット・パクナム住職・プラ・タム・パンヤー・ボディ師の強い要望で実現のはこびとなった上座部得度式であるが、当日は各界からのご臨席を得て、厳かに式がすすめられた。

得度式とは、仏陀の教えに導かれ比丘となる儀式であるが、この日タイの上座部仏教の得度式を受け、戒を授かったのは、まだ幼い四人の子息である。儀式はすべてパーリー語で成されるため、子息たちにとってはじめて接する異言語の学習は、それだけできびしい行であったに違いない。

戒師のプラ・タム・パンヤー・ボディ師の前に座し、声を揃えてパーリー語を唱える姿には哀しいまでの浄らかさがあふれ、参会者に深い感動を与えた。

（詳細は本文に掲載しましたが、ここではその一端を順を追って写真で紹介いたしました。）



浄髪し、白衣をつけて戒師に罪過の許しを請う

戒師、プラ・タム・パンヤーボディ、ワットパクナム住職

両親（当山住職夫妻）から三衣の供養を受ける

三衣を捧げて戒師に出家の許しを請う

タイの僧形で両親から供物を受ける

聖なる巣立ち

赤間　義徳

タイの尊師様がパーリ語で戒を授与され
方丈様の四人のご子息が
方丈様に教わったパーリ語で
一心に唱和している。
その声は時空を貫いて
お釈迦様が生きていらっしゃった
古代インドの
光きらめく静澄な空間に響いている。
仏誕二五五四年四月二日
成寿山「善光寺」釈迦殿に

四人の少年僧が誕生した。
仏法と善光寺を守護する
黄衣の四天王のように。
あなたがたは
大乗と小乗を超えて
釈尊に還る道を果敢に開拓するだろう。
あなたがたとともに
方丈様の大誓願は
豊かに成長し盛んに実っていくだろう。
それは確かなことなのだ。
見よ！
ワット　パクナムより寄進された
仏陀像も金色の微笑を湛えて
聖なる巣立ちを祝っておられるではないか。

タイの黄衣をまとう子息たち

戒を授けられ、タイの僧となった彼らは、たとえ母親といえども、女人に触れることはできない。タイの留学生が彼らの身支度を整えてくれた。

奉迎仏の開眼法要

四月二日

得度式に先だって、タイ国ワットパクナムから寄贈された釈迦牟尼仏坐像プラプッタチナラートの開眼法要が厳修された。

曹洞宗大本山総持寺監院・斎藤信儀老師を導師に戴き、宗門内外・各界の諸先生たちが列席して、金色にひかり輝く等身大の釈迦牟尼仏坐像を迎えた。

法句経

巻頭言……黒田　武志　4
カラー■タイ　ワットパクナムよりの奉迎仏……プラプッタチナラート　2
特　集■タイ法式による得座式
●仏教史上初の盛儀……中村　元　20
●上座部仏教に学ぶ……藤吉　慈海　26
●仏法の点火の清らかな日……鈴木　格禅　28
●謝　辞……伊藤喜三郎　30
●プラプッタ・チナラート……佐藤　俊明　32
●わが国最初のタイ仏教ウパサンパタ……東　隆真　38
●タイ国ワット・パクナムの住職を戒師に……中外日報　47
調査・研究■アジアの遺跡保存と日本人……石澤　良昭　53
エッセイ■禅と衣食住(5)薬石……東　隆真　63
留学記■プーナで出会った人たち……阿部　慈園　68
〃　■チャイのある生活……保坂　俊司　73
レポート■社会に対する仏教僧の役割……中野　良教　77
善光寺だより……84
読者からのお便り……86
レポート■英訳甘露門とその受用について……河内　義宣

題字・グラビア・さし絵　伊藤三喜庵
グラビア撮影　五十嵐千彦
カット　古刷仏集より

開創二十周年記念事業趣意書

この地に在った小庵を譲り受けて仮本堂を建てたのは今から十九年前のことであります。正にゼロからの出発でしたが、み仏の御加護と檀信徒の皆様の絶大なる御協力御支援により今日の盛栄を招来することができ、感激にたえないところであります。

思えば昭和五十七年に釈迦殿が完成して当寺は面目を一新し、翌年開創十五周年記念として釈迦殿本尊の脇仏の制作及び大般若経六百巻を新添し、五十九年には海外留学僧派遣育英会の設立、そして六十年より留学僧の派遣実施という数々の事業を展開し、今や当寺は国内外から注目を浴びております。

さて、明年は開創満二十周年に正当します。これは人間でいえば成人でありますので、この節目を記念して次の事業を実施し、今後さらに一段の進展を期する跳躍台としたい所存であります。

その事業の一環としてまづ昨年、不動殿身代不動明王の眷属（けんぞく）、矜羯羅（こんがら）、制吒迦（せいたか）の二重子像の

制作につき大仏師錦戸新観先生を煩わし、十一月二十八日、開眼供養をおこないました。

今年秋には、不動殿にもつか制作中の大日如来が完成の予定であります。

次に、タイ国ワツワ・パクナムより釈迦牟尼仏の尊像をご寄付いただきましたので、大本山総持寺監院斎藤信義老師をお迎えして、去る四月二日に開眼供養を厳修いたしました。

さらに、宗祖を通して釈尊に還るという私の宗教信念にもとづき「釈尊伝」を上梓して報恩行の一端としたい考えであります。

又、不動殿須弥檀、内陣増改築と境内の整備等をいたしたいと存じます。

就きましては、右記念事業展開のため、何卒協賛くだされ、浄財の御喜捨を伏してお願いする次第であります。

維時　昭和六十三年六月吉日

善光住職　黒　田　武　志

実行委員長　富　永　豊　重

檀　徒　各　位

特集・タイ法式による得度式

仏教史上初の盛儀

東大名誉教授　中　村　元（はじめ）

本日はこのような意義深いご儀式に私のような者が参列させていただき、ご指名ではございますが、お祝いの言葉を述べさせていただくのはまことに恐縮でございます。しばらくのあいだ、お高い所から皆様のご耳をけがすことをお許し願いたいのでございます。

立派な方々が本日ご臨席あられますところ私のような者が参上致すことになりましたのは、ひとえに、多年にわたる黒田ご老師様のご縁を有難く思っているからこそでございます。黒田

ご老師様は、仏法交流のために身を粉にしてご尽力なさっている方でございまして、このような立派なお寺を建てられましたが、近年私が感嘆しておりますのは、目を広く世界に向けられまして、若い仏教者を育てたいというご一念から、若い留学僧の方々を、アジア諸国、欧米諸国にお送りになっていらっしゃる。これは容易にできることではございません。本当は国にやってもらいたいのですが、国はなかなか精神面まで手が回りません。また経済活動の方には力を入れておるようですけれど、大所も精神面には注意を向けてくださらない。そこで黒田ご老師様が独力をもってこの道を開いてくださっている。まことにありがたいことだと思いまして、心から景仰申し上げているのでございます。

若い人をして道を学ばせるという、そのお気持ちは、人様のお子様から始まりまして、この度は全く驚くべきことに、四人のご子息様が同時に本日得度されるという、日本の歴史においても、全くはじめてのことでございます。

このご儀式のためには、タイ国からわざわざ御臨席下さいました、ワット・パグナムでかつてご老師様がご修行なさったそうですがそのご住職様の、プラ・タム・パンヤー・ボディ師のご要望により、尊師を戒師として四人のご子息様が得度式をあげられるということになったとお聞きしております。

私は言葉のほうもわずかながら手がけておりますのではなはだ余分なことを申し上げますが、ダルマは法という意味で皆様もご承知だと思いますがプラというのをうかがいましたら、比丘のことだそうです。パーリ語ではビックと申しますが。それからテヘラというのは高僧のことです。ラージャというのは王様です。ですから、これは高僧の中でも特に偉い方でございます。それからマハームニ、マハーとは大きい

という意味、ムニとは聖者でございます。そういう尊い称号を受けていらっしゃる最高の地位の高僧の方が、国外へお出掛けになって得度式において法を授けるということは、これは仏教の歴史においても初めて、と伺っております。かつて例のないことでございましょう。伺った

者はお導びきいただけますけれども高僧の方が海外からのご依属（いしょく）を受けてはるばるお出まし下さった、これだけでも仏教の国際交流の大きなことがらであると思うのでございます。そうして四人のご子息様が道をお受けになる。ありがたいことでございます。

日本では大体大乗仏教が行われておりまして、このテーラバーダという南方仏教のことはあまり以前には知られておりませんでした。ましてやこちらで得度されたということは、かつて例がないと思います。

本当に私も驚嘆致しましたのは、四人のお若いお坊様方が、パーリ語のこの儀式の文句あるいは聖典の文句を暗唱していらっしゃることです。それは大変なことで、今の日本の青年が日本の古典をどれほど暗誦しているかと思いますと、パーリ語を身につけていらっしゃるというのは驚くべきことであり、それだけでも、テー

ラーバーダ、南方の仏教との交流は、ここに固められたと思うのでございます。

このごろは日本にも、テレビや何かでアジアのことが伝えられるようになりましたけれども、ついこのあいだまでは、お互いに理解が充分ではありませんでした。その一例として申し上げますと、もう二十年ぐらい前になりますけれどハワイで東西哲学者会議というのがございました。これは東と西の間で理解を深めようというものですが、東と西の前に東の間でまず理解を深めなくてはならない。そこで主催者のチャールズ・ムアという教授が特別に席をつくって下さったんです。そこで、北の方からということで私もそこへ出席しました。それから南の方からはたまたまビルマのウ・ティッピラという偉い仏教学者が来ておられたのです。二人並んで質問をうけて、何でも話をするという非常にうちとけた会を開いて下さいました。

その時に、ウ・ティッピラ大僧正様がおっしゃるにはこうなんですね。大乗とテーラバーダということが言われたけれども、私はマハーヤーナ、大乗仏教という仏教があるということを、このハワイのホノルルに来てはじめて知った、とこうおっしゃるんです。そのウ・ティッピラ先生は英語はペラペラで、ロンドンに十四年いて布教に従事されたというんですからマハーヤナ・ブディズムを知られないはずはないんです。ところが、まだその言葉がその雰囲気にあてはまるくらいに、同じアジアの国々の中でも北と南の間の理解というのが開かれていなかった。そういうことを思いますとまずその確実な道を拓いていくこと。黒田ご老師様の四人のご子息様は、いずれまたむこうの方に行かれるということもございましょう。むこうの権威あるテーラバーダ仏教を我々の間に伝えて下さいましょう。そしてまた日本のこともお伝えいただくと

いうことになりましょう。日本のことというのも、あちらには決してまだ十分に知られてはおりませんので、これこそ精神面の、尊いひとつの出来事であると思っております。ことにタイの国の高僧の方々が、道をひらいていただいたということは、私にしてもなんともありがたいことなのでございます。老人は昔のことしか知っていませんから…。

それを申し上げますと、学生時代に、国際連盟の事件がありまして、そのころは満州事変で、日本が世界中から袋だたきになったのです。その時ですね、日本に味方して下さったのはタイの国だけです。国際連盟で問題になった時に、タイの国の代表の方だけが棄権して下さった。消極的にではありますが、日本に思いやりを見せて下さったんですね。で、この恩が、日本人としては忘れることができないと思うんです。その為に、日本の側でもタイの国に何か奉仕しなければならない、と今経済活動の中心がタイに移っているそうです。すでにシンガポールとか香港などに投資する段階は超えて、今、タイの国に目を向けていると申します。ただ、経済面のことだけを考えていたのでは、またエコノミック・アニマルといってたたかれるだけのことでございます。経済面でも政治面でも、活動を正しく立派に実行するためには、精神が伴わなければなりません。

その精神面に黒田ご老師様がご尽力下さいまして、それをタイの高僧の方が心よくお受け下さり、はるばる遠路をおいで下さりまして、そのご好意に深く感謝いたしております。おいで下さいますときには、あの立派なご仏像をおもたらし下さいまして、そうしてそれをお受けするのにご宗門の曹洞宗の淑徳、高僧の方々がお忙しい中から、このように大勢ご参上、ご協力くださったというのは大変ありがたいことだと

思います。

曹洞宗と申しますのは、日本では最大の教団でございます。その最大の教団が、ここに積極的に意志を表明されたということ、非常に、仏教の交流あるいは仏法の交流ということがさかんになるためにまことに有難いことだと思います。さらに、曹洞宗ご宗門だけではございません。本日はお近くということもございましょうが、鎌倉の浄土宗光明寺の藤吉慈海（じかい）ご老師様が、今ご健康をちょっといとわれているそうでございますけれど、わざわざご臨席下さいました。まことにありがたいと思います。ことに藤吉ご老師様は高僧であるという以上に、それと並んで非常に国際的な視野をお持ちになり、現に海外でも、たびたびご講演になっておられまして、外国の人々も尊敬申し上げておるのです。

そういう方々がご臨席になられたということは、本日の御（おん）得度式の意義をますます高めると思います。またお忙しい方々、ご壇家の方々、ご縁のあられる方々が皆様お集まり下さいまして、私いちいちお目にかかってごあいさつしておりませんけれど、このようにご参加下さいましたということは、今後の仏教の交流が、予見され、あらかじめ見ることができるようであります。それによって明るい日本が、さらにひいては明るい世界が、創り出されるのでございます。そう思いますと、四人の若い方が得度したという、これは計り知れない大変な意義があると思いますし、まことに有難いことだと思っております。

一言お祝いの言葉を述べさせていただきました。本日はどうもありがとうございました。

特集・タイ法式による得度式

上座部仏教に学ぶ

浄土宗大本山光明寺　法主　藤吉慈海

私とタイ国との係わりは、学生の頃、東南アジア交流センターの留学生の身で、パクナム寺院にお世話になったことがあり、大変なつかしい所でもあります。今回、パクナム寺院のプラ・タム・パンヤー・ボディ師が来日されると聞き、大よろこびで、得度式に参加したようなわけです。

大乗仏教の日本人は、僧侶や学者も含めて、テーラ・ヴァーダ（南方上座部仏教）を馬鹿にしているというか、やや下に見ているところがありますが、戒律の点では、大いに学ばなければならない点がたくさんあります。戒律の数も

多いし、厳しいものがあります。上座部の仏教は大乗仏教から見ると戒律はよく守っていますが、日本ではいろいろな点において大乗仏教よりも劣るように考えられています。たとえば、上座部の仏教では比丘の教団が強い団結を保っており、その周囲に教団を助ける信者の団体がありますが、その活動が比丘中心的であって近代化に遅れているように思います。

上座部の仏教は東南アジアやスリランカにおいて栄えており、比丘たちも現地でかなり活躍をいたしております。特に教育や医療の面で近代化の推進役になろうとしています。上座部の仏教団は何といっても相当立ち遅れていますから、なかなか大変なことですが、戒律を保つというようなことも真実の仏教のあり方として再び検討される必要があるように私は思います。

法然上人の教えの中に「(酒は)まことに飲むべくもなけれども、この世のならひ」というのがありますが、多くのお坊さんは下の文句だけを採りあげて「さすが、お師匠さまは、うまいことをおっしゃった」と言っては、平気で酒を飲む。私は、法然上人も道元禅師もお酒を飲まなかったと思います。テーラ・ヴァーダのお坊さんたちは、決して飲みません。酒を飲むのは仏教徒ではないと、厳しく戒律を守っておられます。日本のお坊さんたちが、仏跡巡拝などと称してインドを旅行しながら、ビールを飲んだりしているのを見て、向こうのお坊さんたちは、笑っています。戒律を無視してしまった日本の大乗仏教が仏教の真のあり方であるかどうか、考えてみなければならないと思います。

パーリ語を一所懸命勉強して、得度式に臨まれたお子たちのこの精神を、私たちは、これからの新しい仏法の在り方として、大いに考えていかねばならないと思います。

特集・タイ法式による得度式

仏法の点火の清らかな日

駒沢大学　鈴木格禅

本日は大変おめでとうございました。

黒田御老師は私どもの宗旨（しゅうし）の開祖であるところの瑩山禅師、道元禅師を通してひとすじにお釈迦様のところにつながってゆくということを自分の根本にちゃんと持っておられます。宗教を通じて純粋に、まっすぐに、ひたむきにお釈迦様に還っていかれるということがご住職の念願であり信念であり生き方なのであります。そうしてそのために、今生かされている命の一滴残らず全部をそれにささげて、人のために、仏

法のためにつくし切って一生を終わってしまおう、そうお考えになっていらっしゃる。

そのため、日本の仏教の宗旨の如何を問わず、志のあるすぐれた青年僧をすくって、毎年世界各地の僧院、あるいは道場に派遣させ、勉強、あるいは仏縁を深めつつあります。これは大事業であります。心に思いながら何人(なんびと)も成し得なかったまさに大事業を、独力で着々と推進されつつあります。大変な誓願(せいがん)であります。驚くべき実行力であります。そういった誓願に燃える方丈様並びに奥様をご両親に持たれた子供さんたちの、今日は国際的な得度式であります。このご両親の血が子供さんに流れ、その誓願が子供さんに生きてゆかないわけがない。仏法というものが、国境を越え、民族を越えて聖なるひとつの火となり炎となって燃えさかっていく、今日はいわばその点火の清らかな日であります。長く懸念し、賛仰していきたいと願っております。

皆さんがどなたも仰せになりましたように体一杯でパーリ語をとなえて得度をうけられた四人のご子息様の、あの懸念な背中に、深く感動いたしました。

おめでとうございました。

特集・タイ法式による得度式

謝辞

善光寺総代　伊藤喜三郎

本日は大本山総持寺監院斉藤老師、当代仏教界の碩学中村元先生はじめ遠近の諸大徳、同門の宗師等、大勢の方々にご隨喜賜わり、二ツの法要がめでたく圓成いたしご同慶にたえない次第でございます。

尚善光寺は新寺建立にふさわしい、実に創業の智と才に恵まれた黒田方丈が次々と事業を展開し檀家一同遅れてはならじと、協力して参りました。

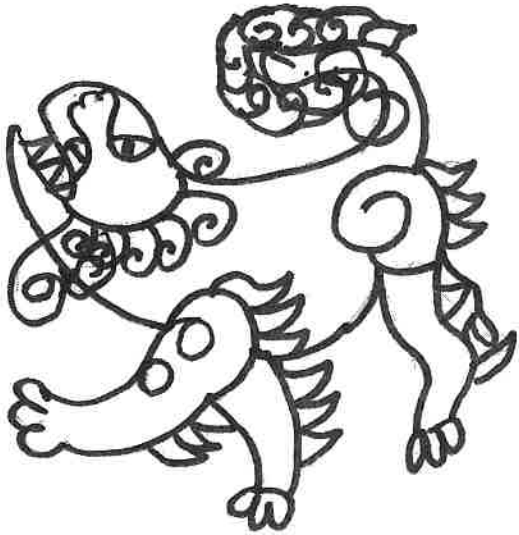
加えて諸大徳各位のお引立てを蒙り、おかげをもちまして開創して二十年、いわばようやく成人に達したばかりではありますが、三百年五百年の歴史を持つ寺々の間に伍して何とか特色のある寺として評価を受けるようになったことは、檀家の一員として法悦至極に存ずるところであります。

思えば今から二十三年前のこと、私がインドに出かけました折、仏蹟参拝を終えて方丈さまに会ったのが最初の出会いでした。

それだけに本日の法要は当時を回想し、感無量なものがあります。

そして本日得度した四人のご子息が方丈さまの意を体して善光寺を今後一層の発展に導くであろうことを思う時、本日ご随喜くださり、法要を盛りあげてくださった諸大徳各位に対して自ら深甚の謝意が湧いて参ります。

そしてこれが本日だけでなく、末長く善光寺をお引き立て下さいますようお願い申し上げ謝辞といたします。



特集・タイ法式による得度式

プラ・プッタ・チナラート

龍光寺住職　佐藤俊明

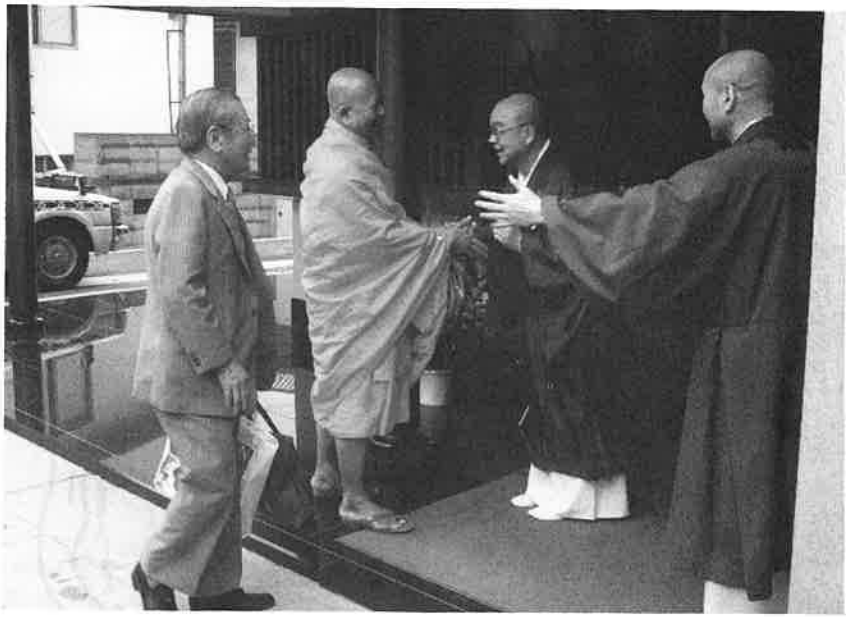
去る四月二日、当寺の四人のご子息の得度式を記念してタイ国ワット・パクナムから身丈一二二センチの金色さん然とした仏像が寄贈された。この仏像は、「プラ・プッタ・チナラート」と呼ばれる、タイ国の仏像を代表する美しいお姿のものであり、方丈様と私にとっては実にご縁の深い仏像である。

昭和五一年の夏、「仏教タイムス」主催で、「総持寺の海外布教を考える」という座談会が開かれた。当時私は本山の出版部長だったので出席要請を受け、この座談会の席ではじめて方丈様と出会ったのである。

席上、方丈様は南方上座部仏教（かつては小乗仏教と言っていたが、大乗に対する小乗では蔑視の感があるので上座部と改称された）との交流を提唱され、それがみのって翌五二年一月、本山では有史以来はじめての試みとして三人の雲水をワット・パクナムに送った。これは大乗

仏教と上座部仏教の相互理解のために、またあとに続く留学僧の出現を期待するためにも、ぜひとも成功させたいことであり、ひろく世間に訴え、理解と協力を得るべきだと考えたので、

私は三人の出発に際して、生活や修行についての手記を送ってくれるよう依頼した。ところが一カ月経っても二カ月経ってもなんの音沙汰もない。言葉や気候風土ばかりではなく、同じ仏



教とはいえ、あまりにも異質な要素をもっている上座部仏教の中に飛び込んだのだから、そう易々と書けないのは当然、とは思いつつも、健康を害しているのではなかろうか、心の張りを失っているのではあるまいかと案じられた。そこで、「激励と取材にゆきたいが」と話したところ、方丈様は「案内しましょう」と、正に渡りに舟のひと言。

こうして六月、羽田を発ってドン・ムアン空港に着陸することになったわけだが、ムツとする熱気の中に三人の留学僧が出迎えてくれた。すっかり上座部仏教の比丘（出家僧）になり切っている彼らの姿に接した瞬間、杞憂は雲散霧消し、深い感動を覚えた。そして翌日ワット・パクナムを訪れ、今回（当寺に来られた）住職と副住職から、彼らが真面目に修行していること、喜んで後続者を受け入れたいという言葉を聞き、安心するとともに、はるばる足を運んだ

ことの意義を再確認したのだった。

その際、住職から、「本山に仏像を寄付したい」といわれた。「どのくらいの大きさのものですか」と問うと、身の丈二・三メートルとのこと。そんなに大きいのでは建物のことも考ええねばならぬし、一存で返答しかねたので、一度帰って貫首禅師の意向を伺ってご返事すると約して別れたのだが、そのとき、私どもは四〇センチ大の仏像をいただいた。これがプラ・プッタ・チナラートだった。

仏像を抱いて意気揚々として空港に来ると、仏像の国外持出しは禁止とのこと。せっかくいただいた仏像、没収されては心外と、現地同行者にいろいろ奔走してもらったところ、予想もしない大きな成果があったのにはおどろいた。

「日本の高僧がありがたい仏像を持って帰られるのだから、エコノミークラスでは失礼にあたる」とて、ファーストクラスに乗せられて帰

ることができた。

さて、なぜ仏像の国外持出禁止となったのか。それは、骨董品あさりの日本人が仏像を買い求め、スーツケースの中に下着やバスタオルで仏像を包んでいたのが発覚したためとか。全くもって心ない話です。

帰って岩本禅師に報告したところ、せっかくのご好意なのだからいただこうとのことだったので、十月、方丈様と同道して留学僧の研鑽の便を図るとともに謝意をあらわすものとして『南伝大蔵経』七十余冊を携行して参上、これを贈呈するとともに、仏像奉呈の寄進状をいただいた。

この機会にスコタイの遺跡を見学しようと、バンコクから北へ四〇〇キロほどの所にあるピサンロークに飛んだ。ここからクルマでスコタイにゆくのだが、途中、この街にあるワット・チナラートにお詣りした。プラ・プッタ・チナラートはこの寺の本尊様で、かつてこの地でビルマ軍の侵入を防ぎとめ、タイ国を護ったという霊験あらたかな仏像として有名である。プラは尊い、プッタはブッタ(仏陀)なので、プラ・プッタ・チナラートといえば、チナラート寺の本尊様というところであろう。

一年後に、「仏像が完成したので、仏像寄付者の供養のため、日本僧侶による日本の法要をおこなってほしい」との連絡があったので、五四年春、団体を組んで奉迎の旅に出た。こうしてお迎えした仏像が本山宝物殿に安置してあり、タイ国の駐日大使が離着任の際はお詣りに来られる。これと同じ仏像が今回当寺に寄進になったわけで、思えば本山の場合もそうだがプラ・プッタ・チナラートの奉迎は方丈様のお力によるものであり、霊験あらたかな勝利の仏であれば、当寺の今後一層の発展を見護ってくれるであろうことを信じ、心からお祝い申上げる次第である。

竜神に囲まれた仏像
法竜（兵庫県・明治時代）

特集・タイ法式による得度式

わが国最初のタイ仏教ウパサンパタ

駒沢女子短期大学学監　教授　東　隆　眞

1

昭和六十三年（タイ国仏教暦二五三一年。タイ国では、国暦と仏教暦とは同じ）四月二日、神奈川県横浜市、曹洞宗・善光寺で、日本で初めてタイ仏教のウパサンパタ（得度式）が、とりおこなわれた。

善光寺住職黒田武志（大圓）老師は、筆者の大学、大学院時代の同窓で、爾来、今日まで交誼をえている。

今回もお招きにあずかったので、友人の一人として、よろこんで参列し、その厳粛な儀礼に、深い感動をおぼえた。

2

黒田武志師は、同窓の石附周行師（群馬県雙林寺住職。日本パクナム会会長）とともに、駒沢大学、同大学院を修了するや、曹洞宗両大本

山（永平寺、総持寺）の特別僧堂に安居し、さらに、揃って、タイ国の名刹ワット・パクナム（バンコク中心街より南西の郊外、トンブリ地区にある。瞑想人〈カマタン〉修行の寺院として知られる。タイ仏教マハニ派に属する）の僧院で、得度をうけ、テーラヴァーダの比丘として、修行した。今を去る二十余年まえ、昭和四十一年のことである。

この仏縁は、十数年後、念願の「善光寺海外留学僧派遣育英会」（理事長、黒田師）発足となって新たな実を結び、今日に至っている。留学僧とは言いながら、女性の在家信者もいる。性別、年齢、国籍、宗派を問わない。ただ問うのは、なによりも熱烈な求道心である。いま、日本人、中国人、韓国人の留学僧が、アメリカ、インド、スリランカ、中国、日本で勉学にいそしんでいる。もちろん、タイ国のワット・パクナムにも派遣されている。善光寺一カ寺でこれ

を行うのであるから、驚嘆するほかない。

さて、このたびのタイ仏教のウパサンパタ（得度式）について、なぜ、あえて、ここに記すのか。

ワット・パクナムのご住職、プラ・タム・パンヤー・ボディ老師を戒師とし、同副住職、プラ・パーワナ・コーソン・テーラ老師（父君は日本人、母君はタイ人。タイの高僧のなかで、ただ一人の日本語に堪能なお方という）を教授師として善光寺にお招きし、善光寺釈迦殿で内外関係者各位の隨善をえて、黒田師のご子息四名（武徳君、高二。泰志君、中二。博志君、中一。賢志君、小三）の得度式が行われたからである。

また、得度式に先だって、ワット・パクナムより下賜された金色まばゆい等身大の釈迦牟尼仏坐像の開眼式が、タイ国高僧のご臨席を仰いで、曹洞宗大本山総持寺監院、斎藤信義老師の

導師のもと、おごそかに修行された。

この釈迦牟尼仏開眼式、タイ仏教ウパサンパタには、中村元博士（東大名誉教授、東方学院長）、藤吉慈海大僧正（浄土宗光明寺法主）、藤井真水大僧正（真言宗増徳院住職）、矢萩信顕（前全日本仏教会事務総長）、奈良康明博士（駒沢大学前副学長）、宮林昭彦教授（大正大学、浄土宗大光院住職）、鈴木格禅教授（駒沢大学）、宮本延雄先生（鶴見大学事務局長）など、宗門の内外、学界の第一級の諸先生が参集された。未曽有の盛儀というべきであろう。

はじめてまのあたりにするウパサンパタから受けた感激は、みなひとしく一様であったとおもう。

その詳細については、べつに新聞、雑誌がとりあげるであろうから、ここでは触れないでおく。

上座部得度による僧名

Takenori Kuroda（黒田武徳）

昭和46年7月23日生（1971.7.23）Friday

スッテ パティ　精進し清い精神をもった人

Yasushi Kuroda（黒田泰志）

昭和49年7月25日生（1974.7.25）Thursday

パンヤー パッティ　智恵においてすぐれた人

Hiroshi Kuroda（黒田博志）

昭和51年2月18日生（1976.2.18）Wednesday

ターナ パッティ　仕事においてすぐれた人

Kenzi Kuroda（黒田賢志）

昭和54年12月25日（1979.12.25）Tuesday

ヤーナ パッティ　知識においてすぐれた人

3

知られるとおり、仏教が仏教として成り立つには、いつの時代、どの地域であろうと、宗派のいかんを問わず、戒、定、慧の三学が、どのようなかたちにせよ、学習されてきている。

戒学によって、生活にきまりをつけ、定学によって、からだとこころをととのえ、慧学によって智慧と慈悲を身につけるのである。しかも、この三学は、それぞれ深く結びついており、どれかを重点的に学ぶことはあるとしても、切り離して考えることはできない。

わが国では、戒（個人的な生活のきまり）は、律（集団生活のきまり）と一緒のものとしてう

けとめられ、戒律とよんでいる。

戒律を宗とする宗派は、戒律宗、律宗、南山律宗という。

律宗は、中国、唐代のはじめ、南山大師道宣律師によって開始された。

道宣律師の孫弟子、鑑真和上は、天平勝宝六年（七五四）わが国に渡来し、奈良、東大寺に戒壇院を建て、日本僧に授戒した。天平宝字三年（七五九）、唐招提寺を開き、ここで入寂した。いま、唐招提寺は、律宗の総本山となっている。

鑑真和上以前に、いわゆる小乗の律が中国からもたらされた。

鑑真和上が伝えた戒は、梵網経を中心思想とする大乗菩薩戒であったらしい。大小乗戒や具足戒も授けている。

鑑真和上が、北伝仏教の本場、中国から日本に上陸して、日本人に授戒したことは、画期的なことがらとされている。

その後、平安時代、空海や最澄をはじめ、鎌倉時代には、栄西、道元、俊芿らも、中国へ留学して、戒律を学んだ。

鎌倉時代のあと、室町時代、安土桃山時代、江戸時代、そして明治、大正、昭和と、おびただしい数の日本僧が、海外の仏教国に出かけ、戒律を授かって帰国した。

これらは、例外もなく、日本人が、インド、チベット、スリランカ、タイ、ビルマ、中国、朝鮮半島などに赴いて、彼の地の僧院で、彼の地の戒律を受け、修行したのであった。

しかし、彼の地から日本にやって来て、日本人に本格的な戒を授け、以後、その影響のもっとも大きく長いのは、くりかえすが、鑑真和上をあげるべきであろう。

4

今度、タイ国のワット・パクナムの高僧が日

本の善光寺にお出ましになり、三帰戒、十戒を中心とする正規の沙弥戒をお授けになった得度式が行われたのは、まさに鑑真和上以来の聖なる出来ごとである。

なかんずく、タイ国テーラヴァーダのウパサンパタが日本で挙行されたのは、わが国最初の盛儀である。タイ仏教としては、実に、二五三一年ぶりのことである。

来賓の中村元博士も、ご挨拶のなかで、この点をとくに強調された。

それゆえ、昭和六十三年四月二日（午後二時より午後三時半）は、日本仏教史に書き加えられる新しい一頁である。

わたくしども日本の仏教徒は、ワット・パクナムの深いお慈悲に、くりかえしくりかえし感謝のまことをささげなければならない。

得度をうけるにあたって、黒田師の四人のご子息は、半年以上もまえから、からだとこころの準備をすすめてきたという。

遊び盛りのはずである少年たちが、かなり長いパーリ文のおとなえごとをことごとく暗誦しているのを聞きながら、学校教育にたずさわっている筆者は、真に感嘆したことであった。

中村先生は、このパーリ文が、このように日本のお寺でとなえられていることこそ、仏教の国際交流につながるとおっしゃった。

黒田師、同夫人の熱い願心にあらためて敬意を表するとともに、四人の新しい仏弟子たちの前途を祝福してやまない。

いまや、わが国の各方面で、さまざまな国際化が叫ばれている。仏教界も例外ではない。

しかし、宗派本位の日本仏教は、存外、海外の仏教を知らない。知っていても、積極的に交流し、理解し、実践して、世界の平和に資することをしない。しているという声もあろうが、まだまだ広く一般化していない。

また、日本仏教は、破戒ないし無戒の仏教といわれる。これは日本人の民族性によるところがあるのかも知れない。持戒は、なかなか定着しないのである。戒を信仰とし、神聖視する南方仏教から日本の仏教は、非難され、嘲笑されて久しい。

戒とは、なにか。仏教とは、なにか。出家を中核としながら在家化してしまっている現実の既成仏教教団では、僧侶のあり方が、その根底から問われているといえよう。

黒田師は、このたびのタイ仏教ウパサンパタは、きわめてプライベートなことに属することだから、できるだけ内輪で済せたいと話していた。

たしかに、プライベートなことといえば、そうかも知れない。しかし、その歴史的、客観的意義は、大きい。

あれを思い、これを思うと、今回の得度式が投じた一石は、私の胸にも大きな波紋となってひろがってゆく。あえて、一文を草するゆえんである。

『中外日報』掲載

日本で上座部仏教の得度式

タイ国ワット・パクナムの住職を戒師に

横浜・曹洞宗　善光寺の4子息が同時に

南方上座部仏教（テーラワーダ）の国タイから高僧が来日して、日本で曹洞宗の住職の子息四人の得度式を挙行するという日本仏教史上にも前例のない盛儀が二日、横浜市港南区日野町一六〇四の善光寺（黒田武志住職）で厳修された。黒田住職が二十三年前にバンコクの名刹、ワット・パクナムで修行した縁により、同寺住職プラ・タム・パンヤー・ボーディの強い要望のもとに実現したもので、これを記念してワット・パクナムから善光寺に寄贈された金色の仏像一躰の開眼法要も営まれた。

史上稀な国外得度

黒田住職の大胆な決断

タイから来日した僧は、ワット・パクナムの住職プラ・タム・パンヤー・ボーディと副住職のプラ・パーワナー・コーソン・テーラの両氏、それに現在、善光寺海外留学僧派遣育英会からの派遣留学僧としてワット・パクナムで修行中の浦田智司（浄土宗）、渋井修（真言宗）の両氏が随身。また世界仏教徒会議（WFB）事務局次長でタイ国日本人会事業部長の小谷亀谷郎氏も同行してきた。

タイ国上座部仏教の僧侶が国外に出て得度式の戒師をつとめるのは、歴史的にも稀有のことといわれ、タイ国の関係者から大きな期待が寄せられていた。日本の仏教界でも異例の得度式のため注目を集め話題を呼んでいる。

黒田住職は「宗祖を通して釈尊に還る」を信念とする人で、横浜・鶴見にある曹洞宗大本山総持寺の特別僧堂での修行を経て、インド仏蹟巡拝の旅に出、さらにタイ国で上座仏教の叢林生活を体験した。その後、アメリカへも渡り、白人社会で曹洞禅の開教師としても二年間過ごした。

帰国後、ゼロから出発して現在の善光寺を新しく開創し、十五年間に本堂・客殿・釈迦殿を相次いで建立、十六年目の昭和五十九年一月に善光寺海外留学僧派遣育英会を設立し、「世界に活眼を開く人材の育成」に尽くしている。善光寺は今年で開創十九年を迎えたばかりだが、檀家数は二千六百戸を超えるという。

自分の四人の子息を一度に南方上座部の伝統に従って得度させ、テーラワーダの沙弥とする得度式を挙行したのは、黒田住職とワット・パクナムの住職プラ・タム・パンヤー・ボーディ

氏との長年にわたる親交と信頼関係にもとづくものにほかならない。と同時に、因襲やセクショナリズムにとらわれず、仏教の振興と現代社会に果たすべき役割の実践に情熱を燃やす黒田住職ならではの大胆な決断でもあった。

寄贈の仏像の開眼法要も

4人の子息　小3から高2まで

テーラワーダの得度式は、すべてパーリ語で執り行なわれる。得度式に臨んだ武徳君（十六歳、高二）、泰志君（十三歳、中一）、博志君（十二歳、中一）、賢志君（八歳、小三）の四人は、パーリ語の得度式次第をすべて暗誦し、進退をこなした。

会場となった釈迦殿は来賓および檀信徒、関係者らで埋まった。曹洞宗管長専使として神奈川県第二宗務所長・梅田文丈氏が出席、来賓として東方学院長・中村元（東大名誉教授）、浄土宗大本山光明寺法主・藤吉慈海、真言宗増徳院住職・藤井真水、前全日本仏教会事務総長・矢萩信顕、駒沢大学教授・奈良康明、同・鈴木格禅、駒沢女子短期大学学監・東隆真（教授）、大正大学教授・宮林昭彦、鶴見大学歯学部事務部長・宮本延雄の各氏、友人の日本パクナム会会長・石附周行（群馬県双林寺住職）、曹洞宗宗議会議員・洞外文隆（神奈川県本瑞寺住職）、関東管区教化センター主監・一適隆信（埼玉県大仏寺住職）、駒沢大学講師・福田孝雄、山形県善宝寺役寮・大八木春邦の各氏ら、また仏師の錦戸新観氏、日蓮宗の横浜市本乗寺住職・従野公徹氏、黒田住職の兄弟の栃木県宗務所長・黒田俊雄、ロサンゼルス禅センター主管・前角博雄、東京都桐ケ谷寺住職・黒田純夫の各氏も駆けつけた。

得度式にさきだって、ワット・パクナムから

贈られた仏像の開眼法要が、斎藤信義大本山総持寺監院の導師により営まれた。大本山総持寺にもワット・パクナムから奉戴した仏像が安置されている。これを日本へ奉迎する役目をつとめたのが黒田住職で、斎藤総持寺監院が導師をつとめたのには、そうした縁もあった。

パーリ語で出家乞う

アンサを掛け黄衣を着用

開眼法要、得度式は、善光寺海外留学僧派遣育英会の常任理事でもある千葉県龍光寺住職・佐藤俊明氏（元総持寺副監院）の司会で進められた。道場が浄められ、斎藤監院によって金色の仏像に点眼され、茶湯が献じられて、拈香法語が唱えられた。曹洞宗管長の祝辞を専使の梅田宗務所長が読み上げた。

引き続いて得度式に移る。本尊を背にして正面に戒師のプラ・タム・パンヤー・ボーディ氏が坐り、その左手に内側を向いてプラ・パーワナー・コーソン・テーラ副住職が坐る。得度を受ける四人の子供たちは、浄髪し、白衣を着けて入堂。両親から受け取った三衣を腕の上に頂戴して戒師の前へ進み、礼拝し、三度重ねて出家を乞う。

「アハン　パンテー　パッパッチャン　ヤーチャーミ」

四人は声を揃えて、規則正しい口調で、覚えたパーリ語を一心に唱える。

「一切の苦を解脱し、涅槃を証得せんがために、導師らよ、御慈悲を垂れたまいて、我にこの黄衣を給いて、何とぞ我示出家せしめたまえ」

―という意味のことばを唱え終わると、戒師は、正式の坐法の一つである「横坐り」を許す。

戒師は得度志願者に向かって、静かに語りかける。

「この沙弥の得度式は上座部仏教の得度式だ。小乗も大乗も同じ仏教にほかならない。沙弥になること、僧になることは、修行者となることだ。即ち十波羅蜜を行じることだ。この波羅蜜を積むことが、あなたたちの目的だ。精神が乱れると仏道を成ずることが出来ない。だから冥想する。それには、頭髪・体毛・爪・歯・皮膚の五相を観ずる。五相に対する不浄観を修して

禅定に入り、執着を断ち、三昧の境に入って解脱することが目的だ」

戒師は法衣の中からアンサ（肩衣）を取り出し、受戒者の首に掛ける。次いで三衣を授与され、黄衣着用を指示される。―ここで四人は別室に入って白衣を脱ぎ、三衣を如法に被着する。

再び現われた四人は、右肩を顕わしたテーラワーダの沙弥の姿で戒師の前に立ち、こんどは三帰戒と十戒を授かるよう乞い、それを受ける。

「プッタンサラナン　カッチャーミ（自ら仏に帰依し奉る）。タムマン　サラナン　カッチャーミ（自ら法に帰依し奉る）。サンカン　サラナン　カッチャーミ（自ら僧に帰依し奉る）」

これを三度くり返す。次いで十戒についても三帰戒と同じく戒師のあとに従って三度唱える。三拝した後、四人は施者から蓮華を添えた鉢を受け取り、戒師の前へ進む。そして、戒師を自らの親教師（和尚）となるよう乞い、三衣

一鉢の儀式が行なわれ、問答があって得度式が終わる。

歴史的な最初の得度式

戒師のプラ・タム・パンヤー・ボーディ住職は参会の人々に次のように話した。

「上座部仏教の得度式は、たいへんむつかしい。三宝に帰依する方でなければ受けることが出来ない。今日の得度式は大へん盛大な儀式であり、そう簡単には出来ない。黒田住職もかつて私の寺で得度された。日本に上座部仏教は無いが本日、黒田住職と奥様は上座部仏教を日本に弘めたことになる。その最初の歴史的な得度式である」

斎藤総持寺監院は、

「御本師黒田白純老師が大本山総持寺に尽くされた歴史を承け継がれ、本日、タイの尊師をお迎えして、ここに三宝が現成した。仏法僧の護持に一層精進させていただくことをお誓いしたい」と、善光寺との因縁をふり返りながら祝辞を述べた。

また、中村元博士は得度式から受けた感激を語りつつ、黒田住職の海外留学僧派遣育英会事業を高く称讃し、

「経済活動においては、日本はアジアや欧米諸国と交流しているが、精神面には目が向けられていない。その中で黒田老師が道を開かれた。さらに、このたび四人の御子息が同時にテーラワーダの得度を受けられたことは、仏教の国際交流の上で大きな事柄だ。これこそ精神面の尊い交流と思う」と述べた。

調査・研究報告

アジアの遺跡保存と日本人

上智大学アジア文化研究所長　石澤　良昭

1　文化遺産の復興に援助の手を

アジアのどこの国にでかけても、日本製品があふれています。このところの円高で誇張された経済大国日本のイメージがあることは確かですが、開発途上国からは政府開発援助（ＯＤＡ）の伸び率に熱いまなざしが注がれています。

こうした日本の対外経済協力が、輸出と結びついた〝ひもつき〟の批判をうけながら、使途の権限を相手国にまかせるなど改善の方向へ進んでいます。文化関係では、外務省の情報文化部があり、機材などの文化無償援助を扱っています。このほかに国際交流基金、ユネスコ・アジア文化センター日本学術振興会などがあります。

私たち「アジアの文化遺産再発見研究会」（事務局　上智大学アジア文化研究所）がとりあげている文化遺産の保存修復問題は、国際協力事業団や国際交流基金では扱われません。文部省の監督下のユネスコ・アジア文化センターも遺跡の保存のキャンペーンを行うのみです。

これまで、遺跡保存修復の国際協力は、ユネスコの強力な支援をうけて行われてきました。

東京で開催された第１回「アジアの文化遺産の再発見」シンポジウム（昭和60年４月15日、上智大）。出席者・ユネスコ事務次長Ｋ、ヌカギアンサー博士

すでに、エジプトのヌビア遺跡、インドネシアのボロブドール遺跡が竣工を完了しています。このほかに現在、アジアはタイのスコータイ、ビルマのパガン、ベトナムのフエ、バングラディシュのパハルプールとバゲラートなど九遺跡が採択され、ユネスコから資金と技術協力の援助をうけ、保存修復が行われています。

しかし、昨今のユネスコの財政事情には厳しいものがあり、各国では細々と自前で保存修復活動を行っているのが現状です。国際キャンペーンによる資金集めと技術協力に期待をかけていますが、なかなか思うように進展していません。私はユネスコの専門委員（パリ本部）として、バングラディシュの仏跡パハルプールの保存修復問題の助言を行っていますが、日本でどのようにこの問題をはたらきかけ、組み立てていくか、模索しているところです。日本は、確かに経済協力の分野で大きな役割を果たしていますが、この経済大国にふさわしい対外文化協力を行っているかどうかを考えてみると、前述のように、文化遺産の保存修復に関する援助問題を扱う省庁が、明確に位置付けられていない

ことからも明らかです。文化庁は、対外文化援助を扱っておりません。もし、日本がアジアの遺跡・文化財等の保存事業、物質的・技術的援助を組織的に行うのであれば、アジアの人々の眼には文化国日本のイメージがやきつくこでありましょう

インドネシア・ボロブドール遺跡事務所会議室で開かれた第２回「アジアの文化遺産の再発見」シンポジウム出席者。ボロブドール遺跡前で（昭和61年10月31日～11月３日）

2　相手国の理解に不可欠

私は、アジアにおける日本の重要な文化的役割として、アジアのこうした文化遺産の保存修復に手をさしのべていくべきであると、提言します。ちなみに、ボロブドール仏跡の保存修復については、救済アピールから一四年の歳月を経て、一九八三年二月に修復工事をおえましたが、その費用は総額二〇〇〇万ドルにのぼり、日本からは二三〇万ドルの拠金が送られました。そして、日本は拓殖大学の千原大五郎教授をこの遺跡の国際技術諮問委員会に送り込み、その修復事業に参画し、石材保存・築石技術を学ぶとともに、インドネシアの歴史と文化を識ることができました。

ところで、一九六七年にユネスコがボロブドール仏跡の救済アピールをだしたとき、このボ

ロブドールを知っていた日本人は何人いたでしょうか。あまり多くはなかったと思いますが、現在では、日本からの観光ルートにはかならずボロブドールがはいっており、多くの日本人が

ボロブドール遺跡の保存修復問題の現地検証研究をする専門家たち

この仏跡に感嘆して帰ってきています。

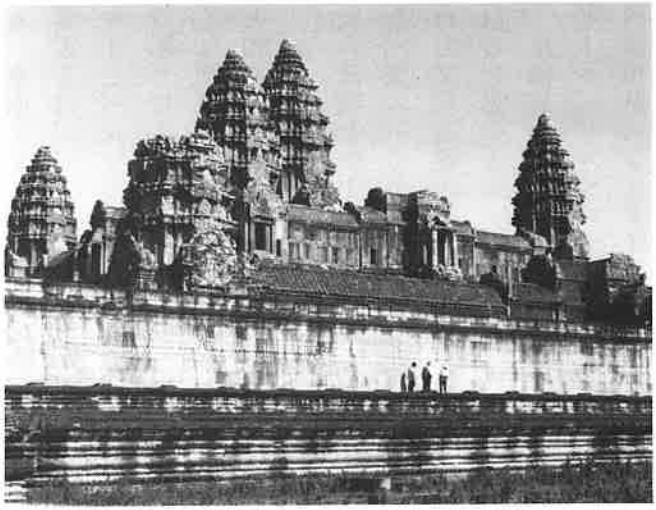
インドネシアの人々への理解は、その民族と伝統文化への尊敬の念なしには成り立ちません。そのてっとり早い方法は、その民族の文化遺産に触れることからはじまります。

アジアの固有な伝統文化の復興と遺跡保存に手助けする日本、文化と平和を愛する日本、アジアから好かれる日本、経済協力にあわせて文化協力を前面に掲げる日本、そうした日本の姿勢を子供たちに受け継いでいきたいものです。その意味で、アジアの諸遺跡保存に対する各国の熱い期待を伝え、日本の文化的な役割をもう一度考えてみたいと思います。

3　「人」の国際協力から

アジアへでかける学生たちにいつもいうことは、次のことです。つまり、アジアの国々を経済発展の面からだけみるのではなく、そこに住む人々が現実の社会のなかでどのような暮ら

しをしているか、その生活がそれなりのシステムのなかでどのように位置付けられているのか、それらを日本の社会と比較しながら実現してほしい、という内容です。



アンコール・ワットの東側塔門から（屋根が解体されたままの第1回廊東面南側部分・12世紀前半・カンボジア）＜昭和55年8月撮影＞

ごくあたりまえのことですが、東南アジアにはインド・中国とは違った〝東南アジアらしさ〟があります。細かくいうと、タイにはビルマと異なるタイ独特の雰囲気があります。そうした

アンコール・ワット第1回廊内庭。荒れ放題で草木がのびている（12世紀前半・カンボジア）＜昭和55年8月撮影＞

タイらしさを形成しているものは何であるのか、学生たちに見聞した範囲で語ってもらうようにしています。

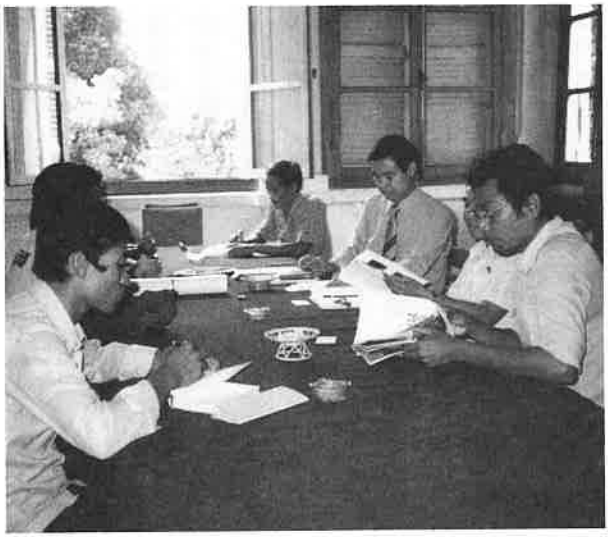
では、東南アジアという地域を造りだしている、東南アジア的な共通の枠組を構成している要素とは、いったい何なのでしょうか。それは、タイとビルマとを比較すると、多くの相違点が浮彫りにされてきます。つまり、その地域もしくは国家を形成している〝らしさ〟には共通性と相違性が裏づけされているのです。

こうした地域研究もしくは民族固有の文化形成の研究を歴史的に検証するには、その典型的な例証の一つとして、この地域において創出された文化遺産の研究が、多くの示唆を与えてくれると思います。

東南アジアには、インドネシアの仏跡ボロブドール、ビルマの仏塔寺院趾パガン、タイの宗教都市趾スコータイ、カンボジアの壮大な伽藍アンコール・ワットなどが、世界最大級の文化遺産としてしられています。これら4大遺跡は八～一三世紀頃に造営されていますが、それは日本の奈良時代から鎌倉時代にかけての時期に相当します。

これらの遺跡には各民族の偉大な過去が刻まれ、当時の人々の最高の価値観を凝集・具現した、歴史的モニュメントでもあり、栄華の痕跡をとどめた民族芸術の総体でもあります。これらの遺跡研究は、一般論として、往時の歴史・文化・社会等の問題を解明する一つの手がかりともなっています。それと同時に、建築・美術・宇宙観・水文諸技術を内包した実物資料としても有効です。特に、東南アジアでは歴史文献が欠落しているため、その意味からも重要な生きた資料となっています。

私たちの研究方法論とその組織の特徴は、次の四点にあります。第一に、これら遺跡が東南



カンボジア情報文化省遺跡局長ウック・チア氏と討論する石澤氏（昭和63年３月18日）

アジアという共通の地域で建設された意義をふまえての相互比較研究です。第二に、民族文化の独自固有性の形成過程の研究です。そして、第三には、各専門分野の研究者に参画してもらっての学術的な研究です。第四に、地域文化協力のパイロット・スタディとして、ユネスコをはじめ遺跡の当該国の研究者を含めての国際共同研究プロジェクトにつながっているということです。

4　五〇年から一〇〇年の展望をもつ文化事業

4年前に日本・インドネシア・タイ・ビルマの四カ国に、それぞれ遺跡研究会が組織されました。この国際共同研究プロジェクトには、四カ国とユネスコから三八名の研究者・専門家が加わり、四大遺跡に共通する保存・修復の技術上の諸問題および、歴史・文化等の研究に取り組み、地域形成研究につながる文化の比較研究を行っています。そして、年一回、各国の研究グループがもちまわりでシンポジウムを開催し、第4回のシンポジウムは一九八八年7月にビルマのパガンで開催されます。

私たち共同研究者一同は、二一世紀に向かって、これらの文化財の保存・修復・研究を遂行

していくという共同責任を再確認するようにしています。そして、五〇年、一〇〇年の長期保存修復計画の展望にたって、アジア版の地域文化協力を一歩ずつ実現していくべき、手をつないだところです。

遺跡を守る協力は、まず研究者同士の信頼関係に基づく「人」の国際協力からはじめなければなりません。この点において、日本の果たす文化的役割がいかに大きなものであるか、あらためて再認識しているところです。

5　修復事業の計りしれぬ波及効果

仏跡ボロブドールは、五年前に修復工事をおえましたが、その後イスラム過激派が爆弾を仕掛け、九基の仏塔を破壊しました。さらに、最上階の大仏塔に落雷があり、被害をうけていますが、その修復も完了しています。

ところで、一九八七年一〇月に第二回シンポジウムを同遺跡の会議室で開催したおり、現場検証をかねて「破壊された仏塔がどれであるかを探しだしてほしい」という課題がインドネシア側研究会から出されました。出席した一二名の日本・タイ・ビルマ・ユネスコの専門家は、なかなかみつけだすことができませんでした。それほど完璧に修復がなされ、その技術水準の高さに感嘆しました。

遺跡の保存修復事業というのは、壊れたもの、損傷した文化財をただ単になおすだけではなく、材質・建築様式・建立時代・宇宙観などの調査研究に立脚したものでなければなりません。その意味において、幅広い波及効果が生じる文化発展事業ともいえます。

第一に、ボロブドールの爆発仏塔の復元工事で示されたように、約一〇年間にわたる修復解体工事は、インドネシアの学術研究全般に強い刺激を与え、研究体制の制度確立と技術面、研究面での人材の養成をもたらし、学術発展に寄

与する契機を作りだしました。第二に、遺跡修復の現代史的な意義があります。文化遺産に対する一般大衆の関心を高めるという、民族心理学的・文化的効果をもたらしています。つまり、遺跡の学術的な解明の結果が、そこに住む人々に還元され、文化的独自性を再認識すると同時に、大きな民族的自負と誇りを付与するのです。

第三に、遺跡の国際キャンペーンをとおして、その国の歴史・伝統文化を世界に紹介するという宣伝効果があげられます。文化遺産は外国人がその国の民族や文化の固有性を理解するもっともよい教材であり、そのキャンペーンが多くの観光客を招致するきっかけともなっています。第四に、遺跡の保存修復の事業を遂行したという自信は、国づくりのあらゆる分野に心理的な波及効果をもたらします。そうした修復事業の成功事例は、近隣のアジア諸国に対しても、やればできるという一種の自信を与えていくことになります。

6　危機のアンコール・ワット

カンボジアにある世界最大級の文化遺産アンコール遺跡群が、倒壊の危機に直面しています。私は一九八八年三月に二週間にわたり、遺跡破壊状況調査を実施しました。六回目の調査はカンボジア南部地方にあるアンコール時代の遺跡を対象に調査しましたが、破壊が予想以上に進行していました。

カンボジアでは不幸にも一九七〇年代からあいつぐ内戦のために、遺跡の保守作業が中断され、多くの専門家が殺され、また国外に逃れました。そのため、三名しかいないこの遺跡専門家が中心となって活動を再開しています。ただし、最大の石造伽藍アンコール・ワットには一九八七年からインド考古総局のメンバー14名がはいり、保守工事を援助しています。

アンコール王朝は九世紀から約五〇〇年にわ

たり、カンボジア全土に都城と寺院を造営しました。その数は一二〇〇カ所にもおよんでいます。その保護作業が一度中断されると、熱帯植物の緑の暴力が遺跡におおいかぶさり、雨もり・浸水による土台と列柱の脆弱化、バクテリアの侵食など、自然の猛威による破壊が進んでしまいます。

カンボジア文部省の遺跡局では、一九八八年現在で三五一名の陣容をもって保守作業の使命を遂行していますが、人材の欠落、修復資材の不足、予算の制限などの悪条件が重なり、思うようにまかせないといわれています。

今回の私の遺跡調査は、こうしたカンボジアの窮状をみかねての手伝いであるとともに、今後の修復計画の立案のための資料収集が目的でした。同じアジアの仲間として、私たち日本人が「熱帯の密林のなかに埋没するアンコール遺跡を救おう」という運動に加勢していく必要があると思います。

スコータイ遺跡の仏像、現在も信仰の対象となっている。(13世紀末、ワット・マハタート 寺院内、タイ国)

禅と衣食住(5)

薬石（やくせき）

（駒沢女子短期大学学監　教授）
東　隆　眞

禅門で、夕食のことを、薬石といいます。米湯、お粥、うどんなどの軽食です。

一般に、薬石といえば、治療薬を指します。新聞の死亡広告に、「薬石の効なく」云々と記してあるのを、ご覧になったことがおありでしょう。

ものの本によりますと、薬石という語は、『春秋左氏伝』（中国の史書。孔子が、魯の国の記録をまとめた。西暦前四八〇年ごろ成立）あたりにも出ているというのですから、ずいぶん古いことばです。

中国では、昔から、病いを治すことを薬石といったようです。

はじめ、石を針（箴）にしましたが、のちには、石が金属類（鉄、銀、金など）になって、今日におよんでいます。

つまり、薬石とは、薬としての石ということになります。

禅門で、夕食のことを薬石というのは、さかのぼってみれば、このことと無縁ではなさそうです。

いったい、出家僧は、午前中に二食するのが、

原則になっています。

これは、ビルマ、タイ、スリランカなどの南方仏教では、いまもかたく守られています。

しかし、中国や日本の僧団では、中国や日本の食習慣を消極的ながらとりいれて、夕食を黙認することになったものでしょう。

けれども、インド以来の原則を、名目上は尊重して、夕食を正式の食事とは扱わないのでした。

それで、夕べにお粥やうどんをいただくのは、身体を養い、饑渇や病いなどを治して、道業を修めるためであるといった理由が添えられるようになり、これを薬石と称するようになったらしい。

薬石の語は、禅門の隠語であるといわれます。

私は、どこかで読んだことがありますが、中国には、薬に、上、中、下の三等がある。

下等の薬は治療のための薬、中等の薬は予防のための薬、上等の薬は健康のための薬のことだといった意味でありました。

上等の薬は、つまり、日常の食事なのです。

中等の薬も、下等の薬も、それぞれなくてはならない大切な薬にはちがいありませんが、日常の食事こそ最上の薬とは、まことにごもっともな考え方です。

「医食同源」という中国のことばも耳にしますが、これも、このへんのことを指しているのでしょう。

先日、そんなこともお話ししました（昭和六十三年一月三十日。日本仏教研究所主催研修会。演題「禅の日常化」。於日本学士会館〈東京大学講内〉）ところ、聴集のなかに、インド人、ナンシー・マントリ博士がいらっしゃいまして、食べ物が薬だとする考え方は、古くからインドにも伝えられていますとおっしゃっておりました。

禅門でも、「良薬（お食事）をこととするは形枯（身体）を療ぜんがためなり」と申しますから、やはり共通するわけです。

こうした食べものに対する基本的な発想は、千古不磨の真理だと言って、決して言い過ぎではないでしょう。

ところで、禅門で薬石（夕食）を摂るようになったのは、かなり古いことのようで、中国、唐代からで、はじめは米湯を飲んでいたらしいのです。

日本では、最初の本格的な僧団の規定のひとつ、鎌倉時代、道元禅師のご撰述『典座教訓』や『赴粥飯法』を見ますと、薬石のことには触れてありません。

朝の粥と昼の斎（飯）の二食のことしか述べてありません。

ただし、道元禅師は、永平寺で、雪が降った寒いときは、薬石を許しておられます。

温石ということばがあります。

その意味のひとつは、石を焼いて、これを布切れに包んで、お腹に当て、からだをあたためたり、飢えをしのいだりするといいます。

禅門の薬石も、この温石のことだとする解釈も伝わっております。

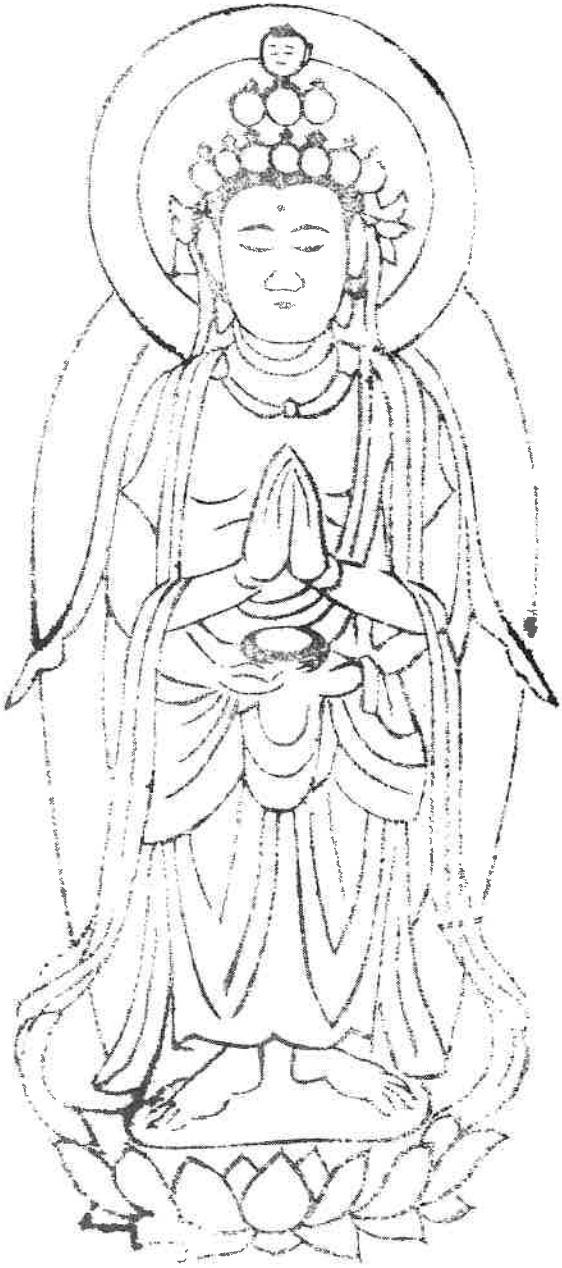
が、いま、道元禅師のいわれる薬石とはいったいなんであったのか、知るよしもありません。

鎌倉時代のすえ、瑩山禅師の『瑩山和尚清規』には、薬石ということばはありませんが、夜分の行事を記すなかに、粥ということばが出てまいりますから、粥を夕食としていたらしいことがわかります。

しかしまた、瑩山禅師のあと、大智禅師（はじめ瑩山禅師に師事し、やがて瑩山禅師の法嗣である明峯素哲禅師の法統を受けた。『大智偈頌集』で有名）のかな法話『十二時法話』には、薬石は登場しません。

このように、道元禅師や瑩山禅師のころ、つまり鎌倉時代から室町時代にかけて、禅門では、薬石は実際には行われていたらしいのですけれども、それは、まあ、ひそかに黙認されていたというような状況であったのでしょう。

今日、修行道場はともかくとして、一般の禅宗寺院は、すでに在家化していますから、妻子のことを考えると、米湯、粥、うどんを夕食にするということはできないわけで、そういう点からいえば、薬石は形骸化してしまっています。



さて、また、仏教、禅門では、なぜ、一食ないし二食を原則としてきたものでしょう。

いろいろ調べてみましたが、現代のわれわれの知性を十分に説得させるような論拠を見いだすことはできませんでした。これは、私の臆測ですが、元来、比丘（びく）、比丘尼（びくに）は、人びとから供養をうけて生活する非生産者ですから、物質的な生活面は、最少限にとどめる。えりごのみせず、貧ぼることのないように、こころがけなければならぬでしょう。

また、比丘、比丘尼は、自己中心の欲望、たとえば性欲や食欲を抑制して、こころの平安につとめなければなりません。美食や、飽食は、修行生活を破壊するのです。

また、比丘、比丘尼は、食べることをほしいままにすると、保健のために、けっしてプラスにはならないことを、生活経験から知ることができ、愚かなことを避けたとおもわれます。ともあれ、今後の課題にしたいとおもいます。

一般に、一日に二食か三食かということについていえば、いずれもこうでなければならぬときまったことはないようです。

わが国では、平安時代から、すでに、朝夕二食の食習慣があったようで、鎌倉時代になると、一部では、朝昼夕三食が行われるようになったといいます。

江戸時代には、昼食を加えての三食の風俗がひろまったようで、それまでの玄米食から白米食が主流となりました。

西勝造氏の主唱する西式健康法では、朝食の廃止を唱え、二木謙三氏も一日二食論をみずから実践されていました。

これらは、主として健康上の理由によるところが多いと思われますが、いまも信奉者はいます。

インド留学記

その5

プーナで出会った人たち(2)

東方学院講師
駒沢大学講師
阿部慈園

三　ゴーカレー先生のこと

1

わが国の学界では、学者はどこかの研究機関に所属していないと一人前の学者として認められない。なになに大学の教授、あるいは助教授、講師でないと、いくらいい論文を書いても認められない。評価し、引用してもらえない。また、所属の大学を退官するとタダの人のように見なされる。つまり、肩書がないとどうも肩身のせまい思いがつきまとう、そのような風潮が、わが国の学界にはあるようです。

こんなことをうそぶく学者もいるとか聞いています。

「肩書がそのひとの実力である」

と。ある意味ではそうかもしれません。しかし、そんなひとに限って、自らのポストに安住して、著書も論文もほとんどなく、教壇に立って毎年

同じ講義をくりかえしているのが常です。

学人の学人たるゆえんは、学習と思索の継承にあるとわたしは考えます。そして、学習と思索の跡を活字化すること、つまり著作を世に問い、論文を書き続けることです。それを停止したらもはや学人ではないといえましょう。

インド・プーナのP・V・バパット先生、V・V・ゴーカレー先生は大学を退官され、自由の身になられてからも、黙々と研究活動を続けておられる真の学者といえましょう。かつまた、肩書なしの「P・V・バパット、プーナ」「V・V・ゴーカレー、プーナ」だけで世界に通ずる本当の学者です。

今回は、プーナ留学中にバパット先生ともども、強い印象と影響とを受けたゴーカレー先生の人となり、研究態度の一端を書き綴ることにしましょう。

2

ゴーカレー先生は、マハーラーシュトラ州の最上級のコーカナスタ・バラモンの家に生まれました。ドイツに学ばれ、中観哲学の研究でボン大学から学位を取られました。プーナのファーガッスン・カレッジやプーナ大学の教授をされたのち、デリー大学仏教学科の長を、バパット先生の後つとめられました。現在八十七歳であられます。

先生は、日本に高崎直道・中田直道・川崎信定・八力広喜・江島恵教先生などの多くのお弟子を持っておられます。特に大乗仏教の権威であると同時に、サンスクリット関係の写本読みに関しては現在世界のトップであられます。

わたしは、昭和四九（一九七四）年一二月から約二年間、バパット・ゴーカレー両先生の『律経』（ヴィナヤ・スートラ）校訂の仕事のお手伝いをさせていただきました。ゴーカレー先生の綿密な写本解読とバパット先生の該博な教理知識とがあいまって、校訂の仕事がなされていくのを見て、学問研究の真髄をかいまみた思いがしました。

たった一つの単語で、両者の意見があわないとき、討議は三十分から四十分にまで及びます。決して粗悪なテクストを世に出さないという考慮がなされているからです。わたくしの仕事は、北京版チベット訳を大きい字で書き写し、それぞれの単語に『マハーヴィユトパッティ』の訳を付けるということでした。仕事中まれに、わたくしがヒットを飛ばすと、ゴーカレー先生は「ほう」と優しい視線を投げかけてくれました。

この仕事は毎週火曜と木曜、バパット先生宅で、朝の九時からなされましたが、十一時半近くになると、ゴーカレー先生は、

「今日はここでやめよう」

といわれます。バパット先生はもっとやりたそうな顔をされてゴーカレー先生を見つめられます。しかし、ゴーカレー先生の目を気づかわれてか目を伏せられます。そのとき、ゴーカレー先生の右目はほとんど失明に近つたのです。のちに、先生は左目に視力を集中させるために、より悪い右目を摘出されてしまったのです。

それゆえ、口悪い八力先生とわたくしは、ゴーカレー先生に「片目のジャック」、バパット先生には目が小さくかわいいので、「鳩目のバパッ

ト」というニックネームを呈示してしまいました。もちろん敬愛をこめた呼称ですので、どうか両先生おこらないでください。

3

ある日、何かの用で先生のお宅を訪ねました。先生は庭に出ておられ、わたくしをみとめられて、

「ミスター・アベ、これはクリシュナ・カマルというんだ。ハッハー」

といいながら、花を一輪手わたしてくださったことがありました。「クリシュナ神の蓮」ほどの意味を持つこの花は、紫紺色をしていて、直径は十センチメートルほど。花弁は、六、七枚で、昼間咲く花です。蓮科に属する花ではなく、つた科に属するようです。花の色、大きさ、花のつきぐあいから見て、わが国の「紫鉄線」によく似ています。

このクリシュナ・カマルは、先生の上品でリベラルで、アカデミックな人となりをよく映しているといえましょう。

昭和五七（一九八二）年五月インドの真夏に、わたくしは新婚旅行に留学地を選びました。新妻に、釈尊の生まれた国、自分が留学した所を見せたかったからです。いや、プーナの人たちに妻を見せびらかしたかったのかもしれません。

刺すような熱さを手の先に感じながら、ブーゲンビリヤが咲き乱れ、火炎樹が赫々と燃える昼さがり、ゴーカレー先生の家のベルを押しました。ややあって、先生は、

「ミスター・アベ、よく来た、よく来たね」

と、大きなあたたかい手をさしのべてくれました。そして、左目を大きく見開いて、妻を頭のてっぺんから、足のつま先まで見やり、

「ミセス・アベ、ウェルカム・ウェルカム」

と、両手を握りしめました。美味しいインドティーと油であげたお菓子をいただきました。

4

昭和四七年、日本西蔵学会の招きで、先生は来日されました。東京大学でも講義をされましたが、聴講していたわたくしは英語力の貧しさゆえに、先生がときにいわれるジョークにワンテンポ遅れて笑い声を発し、まわりから一瞥されたことを記憶しています。

先生の学的業績は枚挙にいとまがありませんが、特に、先生には親友でもあった、高名な数学者・インド史家D・D・コーサンビーとともに校訂した古典サンクスクリット詩選集『スバーシタラトナゴーシャ』と、世親の『倶舎論偈頌』（アビダルマコーシャカーリカー）のテクスト校訂が挙げられるでしょう。ともに専門学者の絶讃を受けたものです。

ゴーカレー先生どうか長命であられますように。

（つづく）

インド留学記

その4

チャイのある生活

東方研究会
研究嘱託
保坂俊司

軽い朝食のおかげですぐにおなかがすく、そこでチャイ（ミルクティー）を飲みにゆくことになる。

インド人のチャイ好きはつとに有名である。このチャイは中国から入って来たらしいが今ではすっかりインドの食文化の中心に腰を据えている。どんなところに行っても、このチャイだけはないところがない。そして、一年中季節を問わず人々に親しまれている。

例えば夏の暑い時期、湿度五パーセント以下温度五〇度を越えるころでも、木蔭に腰をおろして頭の痛くなるほどに甘いこのチャイを飲むことが、インド人の楽しみのひとつとなっていることは、やはり同じようにこの暑さを経験したものでなければ解らないうまさであろう。

インドのこの時期は焼けつく太陽が、生きとし生けるものの水分を一滴のこらず絞りとってしまう。木々は葉を落とし、そうでない木も弱々しくただふりそそぐ太陽光線に身をやかれるにまかせている。人間とてこれらの木々となんら

変わりはない。

身体の水分の多くは、薄いインドサラサの上着をいとも簡単に通り抜けてゆく。従ってまったく汗をかいたという感覚はない。ただ無性に

喉が乾くことで、身体中の水分が不足していることがわかるのである。しかし、ここで生水を飲んだら地獄となる。だいいち、この時期の水は水質がとくに悪く危険である。いきおい我々が水分を得ようとすればこのチャイのお世話にならねばならないのである。

はじめは、暑い時期にお茶を飲むことに少々違和感があったが、いざ飲んでみると意外や意外、一瞬にして汗となって玉と散るがごとくにチャイは身体の中をかけめぐり、毛穴から素早く蒸発し、その際、溜りに溜った身体中の熱気を外に持ち出してくれる。

その一瞬の清涼感はどんな高価なクーラーも

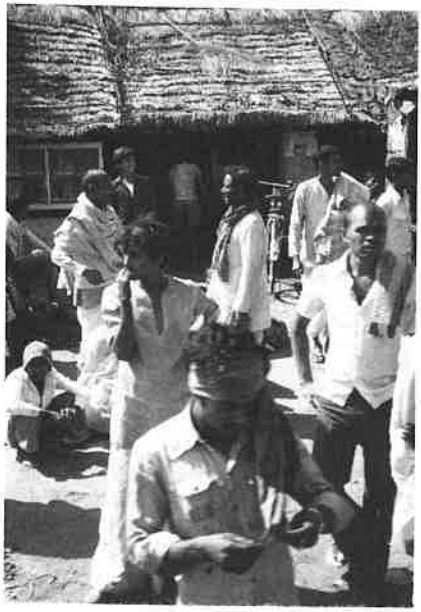
及ばない。木蔭に腰をおろして汗をぬぐいながら飲むチャイの味わいの深さは、インドの文化のふかさにも優るとも劣らないのではないかと私はおもっている。

この庶民的飲み物であるチャイを売るチャイ屋さんがまた楽しいのである。

尻が地面につくように座り、薄汚れた服にドーティーと呼ばれる腰巻きを巻き陽気な話をしながらチャイをいれている。このチャイ屋さんたちのほとんどは田舎から出てきた人たちである。チャイ屋は彼等の最も簡単なアルバイト的職業なのであろう。そして、恐らくこのチャイ屋ほど簡単にできる商売はないのではないかと思えるほどである、その数も大変多い。

チャイ屋はある日突然できるのである。例えば大きな木の下とか、建物の横とかちょっとした空間があれば、すかさずチャイ屋はやってくる。それもそのはずで、彼等の道具はいたって

簡単、コンロと湯沸かし、そして水牛の乳をいれる入れ物、あとはコップを少々。これですべて。お茶は何度も使うし、砂糖はインドでは激安なのでそうもとではかからない。場所さえみつければあとはひとのやってくるのを待つばかりとなる。時として、まったくひとけのない荒野にチャイ屋さんが居たりして驚かされることもある。いずれにしても、この一杯五円ほどのお茶に目のないインド人は甘いものに蟻が群がるように、チャイに群がって来る。



カフェオレのような色のチャイを啜りつつインドの味を楽しんだのが昨日のことのように思い出される。

私のいた学生寮の中にもこのようなチャイ屋が店をだしていた。小腹のすく十時頃になると、生徒たちが三々五々集まってくる。そこで皆思い思いにチャイを片手に議論するのである。

勿論、チャイはこのように庶民の飲み物というだけの存在ではない。ありとあらゆるところで先ず供さるるのが、このチャイなのである。

私がある用事で、ザイルシィング大統領の官邸に呼ばれた時にも、やはりチャイが振る舞われた。このときはさすがに路上で飲むチャイとはことなり、インド共和国の国章であるライオンが金地に浮彫りされていた。

インドの「飲みニケーション」は日本のように酒ではなくチャイなのである。

●レポート

社会に対する仏教僧の役割ーその起源と発展

スリランカ留学僧　中野　良教

一　緒　言

各国における社会奉仕のあり方はそれぞれの国の事情や社会構造により様々である。現代の日本においては、政府の一般的な福祉政策や社会保障を別にして、宗教団体により組織された社会奉仕活動の主目的は人々、主に精神障害に悩む人々の安寧にあるのである。しかし、他の国々、特に第三世界では、奉仕活動は貧困、栄養不良、健康不全といった他の必要事を満たすためになされている。この点、物質的な快適さや工業文明に容易に誘惑される日本の若者達は、往々にして精神的に病弱であり、その結果生命を失ってしまうことがしばしばある。可能な限り我々の社会活動により彼らを正しい道につかせるよう、彼らを適切に取扱う必要がある。

片や、老人層についても大きな問題がある。定年退職後、もはや若かった頃のように社会で有効に活動しえなくなり、心理的に落ち込む老人も多い。そのような人達にたいして、宗教的福祉社会は生命の自然に満足することの必要性の悟りを持たせることができる。これは我々の

生命の元初からの注目を要する一般的事実である。仏教の精神的奉仕を通した社会活動によって、人生の固有の諸特性に関する釈尊の教えの助けを得て、これらの問題を解決することが可能である。

2　仏教僧侶の役割の根源的理念

仏教僧侶の役割については、Sangha の聖職位階のそもそもの初めにおいて、釈尊が明瞭に指摘しておられる。Order の六十人の若者を集めて釈尊は次のように言われた：「ビック達よ、私は人間の、神の、すべての束縛から開放された。汝らビックも、人間の、神のすべての束縛から開放された。さあ、ビック達よ、行きなさい、そして行脚しなさい、多衆の利益のため、多衆の安寧のため、この世への思い遣りから、善のため、利のため、神と人の安寧のために、汝ら二人が同じ道を行くことなかれ。ビック達よ、初めに素晴らしく、途中にて素晴らしく、終りにも素晴らしい教えを、心にて、言葉にて、説きなさい。聖なる完全、至上、純粋の生を広めなさい。」1)　この言葉から、二つの重要な点を考える必要がある、即ち、一、僧侶は(Arahantship)を達成しなければならないこと、二、人々の安寧のために教えを説かなければならないことである。

釈尊によれば僧侶に四種類ある。一、道を極めた者(Maggajino)、二、道を説く者(Maggadesako)、三、道で生活する者(Magge jivati)、四、道を穢す者(Maggadusi)の四者である2)。

このうちの一番目の者は不安を克服し、悲しみを去り、Nibbana に愉しみ、超然として、人々や神々の指針となる賢者として讃えられる3)。二番目の者は、全教義の知識を持ち、それを人々に解説を得さしめるべく教説する僧侶である4)。Arahatship の道の定めにしたがって生きる

者は第三の僧侶である5)。第四種の僧侶は腐敗し悪徳に身を委ねる者である6)。これら四種類のうち第一番目の者が最高の者として称賛されることは明らかである。第二種の僧も、その定義から、第一種の僧と同様に人々の安寧のために多大の奉仕が出来るのである。しかし、第三種の僧は、自らの利を計ることに専心して他者の安寧を求める暇がない。この注解によれば、第四種の僧は、社会のためのみならず、本人のためにも有害である7)。上記のことから、第一種と第二種の者は、人々に奉仕する傾向のゆえに、人類の福祉の発展に有用な僧侶である。事実、どんな僧侶も、正しい知恵を身に着け健全な基盤を踏まえていれば、必要に応じ社会において何らかの務めを果すことができる。上に述べたことは、釈尊の口から出た例えば次のような言葉から裏付けられる、「慈悲の心をもって生き、責務に完全となれ、そうすれば喜びに満ちて悩みに別れを告げることができよう。」8)、「仏陀の教えに専念する者は、たとえ若きビックといえども、雲無き月の如くこの世を明るく照らす者である」9)。

上述のように、Dhammaを学びDhammaに生き、Dhammaを説き、Dhammaを教えることは、それぞれ相切り離せない重要な仏教僧侶各人の役割である。このゆえに、これら二つの徳性を完全に達成し実践により高度の経験を積んだゴータマとその偉大な弟子たちは不屈の人格鍛錬に有能な者10)、人々に道を見る光りを照らす者と称される11)。

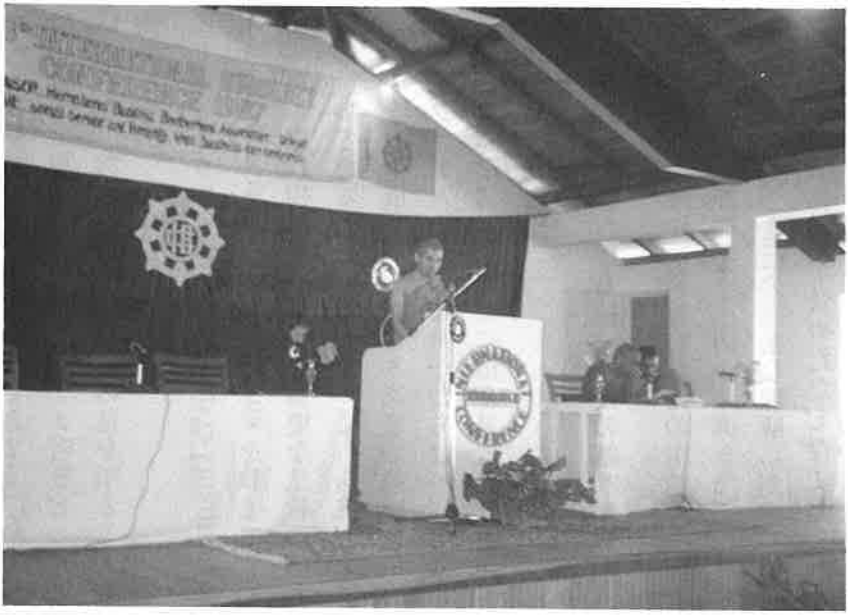
3　初期仏教における社会奉仕の基本理念

社会奉仕の理念は釈尊の教えの主題の一つ、即ち、自己の理解(attan)12)から導き出される。Nikayasでは、自己の完全な理解に到達した者(attannu)13)を釈尊が誉めたたえたことを我々

は知る。その者は、人が相互いに愛するものであることを知り、故に自らを愛する(attakama)14)。したがって、人は他人を害してはならない15)と言う理念がこの教義から当然出てくる。この根本の相において我々は社会の衆人に対する仏教徒の根源的態度の概念を知ることができる。

自己愛と他者愛という根本理念は、幾つかの仏典に見られるように16)、更にMetta(愛ある親切)とKaruna(同情)へと発展している。さらに、我々は釈尊の弟子たちの幾つかの詩の中に、彼らが師ゴータマのことを全世界17)に対する親切18)と同情の偉大なる聖人等と言っているのを知る。これらはゴータマ・ブッダがMettaとKarunaを会得したと言う実事を物語る好例である。

MettaとKarunaの基本概念は、実行を重ねるにつれて、Mudita(感謝の喜び)とUpekkha



（脱執着）へと発展した。Metta. Karuna. Mudita. Upekkha の四要素は四倍の人生としての同系の一総体を成す19)。

Mahayana 仏教では、上記四概念の理念は次の四つの無限の徳20)として説明されている。一。慈悲の無限の徳、二、同情の無限の徳、三、喜びの無限の徳、四、不偏の無限の徳。上述の意味において、崇高の人生の構成部分であるこれら四要素はいずれも現世の利益と安寧に、そして究極的には幸福につながるものである。特に Mahayana 仏教が進化しつつあった時代には、人類の精神的発展に向けてこれら四つの無限の徳は強調され、社会奉仕の根本思想として採用された21)。

かくて、仏教徒の社会奉仕の目的は、自らの福利(attakama)の達成に始まる仏教徒としての Metta や Karuna といった愛の基本概念に基づくものであった、と結論づけることができる。さらに Sariputta が述べているように22)、釈尊の生涯を象徴するこの仏教徒の愛はその至上の教義それ自体と等しいものである。

4、Mahayana 仏教における社会奉仕の基本

偉大な同情者としての釈尊の至上の生涯は、Mahayana 仏教における Bodhisattva の理想の生涯と比肩しうるものである。

Mahayana の経典と文典は、しばしば強調される Bodhisattva の理想に従って、人々の安寧を絶えず説いている。その傾向は特に中国と日本で極端にまで発展をみる。Bodhisattva 教徒としての経歴は、人々の安寧と開発のために一仏陀となる固い決心から始まるべきである。この決心は「Bodhi の心」と呼ばれ、必要とあらば自己の生命を犠牲にすることも辞さないという非常に堅固なものを言う。

西暦十三世紀の日本の道元禅師23)もその著作

のなかで次のようにBodhiの心を強調している、「Bodhiの心に目覚めることは、あらゆる感覚ある生き物が渡り終えるまでは自分が（悟りの）彼岸へ渡らぬことを誓うことを意味する。平信徒であれ僧侶であれ、天界或は斯界に住む者は皆速やかにこの誓いを立てるべきである……。Bodhiの心に目覚めたものは既にして全人類の師である。七歳の少女といえども仏教徒の四種類の師となり万物の母となることができる。（仏教においては）男女は完全に平等だからである。」24)

上に述べたのと同じ理念から出てくる誓いがBodhisattvaの次の四大誓いの中にある。

一、万物が如何に無数にあろうとも、私はそのすべてを救うことを誓う。

二、私の妄念が如何に無尽蔵であろうと、私はそのすべてを根絶やしすることを誓う

三、dharmaの教えが如何に広大無辺であろうとも、私はそのすべてを修得することを誓う。

四、仏陀の道が如何に無限であろうと、私はその道に従うことを誓う。25)

上記の四つの誓いのうち、特に一番目の誓いは前述の道元の言葉の理念に一致する。この一番目の誓いが愛他主義であることは明らかである。Bodhitattvaのこの四大誓いはMahayana仏教徒の間では共通の誓いとしてよく知られている。

道元は人々のために次の四種類の智26)を説明している。一、寛大—精神的物質的施しをすること。二、愛ある言葉。三、慈悲ある心—身体、言葉、心の善行にて生ある物を益すること。四、識別—無差別、又は自己と他者とを区別しないこと。Mahayanaの経典にしばしば出てくるこれら一群の実践事項はCattari-sangaha-vatthuni 27)（同情の四基盤28）と呼ばれるパー

リ語に対応する。Mahayana 経典に見るかぎり、これら四つの実践項目は、生ある万物をまとめて解脱せしめようとする Bodhisattva の運動の基盤として数え上げられているものである。簡単に言えば、これら四つの実践は仏教徒の同情行為であると言うことができる。

上記のように、仏教僧侶は、衆者に道が見えるように光を担う者(ukkadharo)として社会で責務を果しながら人々の安寧のために教義を学び、教える者たるべきである。上記の指針にそって我々が自らを鍛錬すれば、争いや不和の無い調和ある社会が実現しよう。Metta や Karuna といった仏教徒の愛に立脚した我々仏教徒の社会奉仕が、異なる問題を有する如何なる国においても育成可能なことは疑いないところである。

釈尊の次の言葉は銘記すべきである。

「慈悲の心をもって生き、責務に完全たれ、そうすれば喜びに満ちて、悩みに別れを告げることができよう。」

1) Vi, Mahavagga, 20 ページ; SBE, 112-113 ページ. 2) Sn. 84 3) 同 86 4) 同87 5) 同88 6) 同 89 7) Sn-A 162 ページ 8) Dhp. 376; SBE 88.ページ 9) 同 382; SBE. 89 ページ 10) Purisadammasarathi 11) Ukkadharo manussanam 12) V.I, Mahavagga. 23 ページ 13) A.IV,113-114 ページ 14) A.II、21 ページ 15) S.I、75 ページ 16) A.IV,150-151 ページ 17) bbalokanukanukampaka (Therag,625); anukampaka(同 1045) 18) karunikamahamuni (同 1143);karunaka(同 870); soft-hearted 19) Catubrahma-Vihama.20) Catuay apramamani(SK). ness.PTS.Dic.537 ページ参照 21) Taishoshinsyudaizokyo (T),第14巻 538,554 頁 22) Miln.394 頁

※尚昨年十二月八・九日の両日コロンボ郊外のカダワタで行われた国際仏教徒会議のテーマ〈仏教徒は社会に対して何を為し得るか〉において講議を要請され「社会に対する仏教僧の役割―その起源と発展」と題して発表。

●善光寺だより

××

●全超寺で晋山結成

四月七日、本寺光真寺のご長男光泰師が、全超寺において晋山結成式をなさいました。

当山からは黒田住職の愛弟子・瀬之間和仁師が首座として、又、次男泰志君が弁事としてそれぞれの役目をつとめあげました。【写真上】

●インド仏蹟の土を踏む参道完成（龍光寺）

インド仏蹟の土が埋められた参道

当山を支えてくださる佐藤俊明老師のご自坊（千葉県の龍光寺）に、インド仏蹟の土を埋めた参道が完成しました。

この土は、昨年当山住職と渡印され、仏蹟の各所を参拝されたときに持ち帰られたもので、インドに行くことができない人でも、その地を感じることができるようにと発願されたものです。

○生誕の地　ルンビニー園の土
○苦行の身心を浄めたネーランジャラー河の砂
○悟りの地ブッダガヤ金剛宝座の石片
○初転法論の地サー

ルナートの土
○説法の地、霊鷲山・竹林精舎跡の石、祇園精舎跡の土
○入滅の地　クシナガラの土と、御影石にその地が刻まれています。拝登の折にはぜひこの参道で、お釈迦さまに思いをはせてください。

●丹羽永平寺貫首に糞掃衣贈る

当山住職とのご縁で、以前にも総持持の梅田貫首に糞掃衣を献上された池沢悦二氏夫妻が、この度は、やはり黒田方丈の案内で永平寺に上山し・丹羽貫首に新たな糞掃衣を献上なさいました。

遠山形十五条の糞掃衣（おけさ）は、衣財（布）を成蹊学園高等女学校の校長をつとめた奥田正造氏の形見の黒紋服として、一年半を費して一肩一肩縫い上げられたものです。

池沢夫妻はじめ門弟の田中氏、奥田氏の門人百五人が各地から参集して永平寺に参拝・献上のはこびとなったわけですが、四月二十一日、糞掃衣を搭（か）けた丹羽貫首の導師により、奥田正道夫妻と池沢、田中両家の先祖代々諸精霊のために供養の法要が営されました。

糞掃衣を着けられた丹羽貫主

ご寄付御礼

●海外留学僧派遣育英会

黒田　能勝殿　二万
高三　公一殿　五万
岡田しな子殿　五千
永島　俊子殿　二万
遠藤　清勇殿　一万
鳥屋原百合子殿　一万
藤原　君子殿　一万

●『成寿』賛助

大道　晃仙殿　二万
長国寺（岐阜）殿　一万

●読者からのお便り

拝復「成寿」第九号有難く拝受いたしました。

特に当号は武志老師がコレージュ・ド・フランスの学術的な国際会議で、御自身の体験を踏まえ、新世紀の仏教はいかにあるべきかを御呈示された意義深き内容が掲載され感銘を受けました。

また仏教研究及び仏教の今後のありようについては、過去及び現在の反省を踏まえ奈良教授が、広い他の学的関連領域とのかかわりから、展望しておられる点、多くの示唆を与えるものと思います。

四月には、タイ上座部の法式による得度式が、タイ仏教の大長老によって執行されること、宗派仏教の弊風を打破し、仏教による国際交流と、仏教思想による、全地球、全人類の福祉と恒久平和の実現の可能性を示すものとして誠に意義深く、この大行事を実現せしめる、大圓老師の熱意と仏教者としての無倦の御精進により結果せるものと貴山の益々の御発展と法体堅固を念じ上げます。

横浜市緑区　福田　孝雄

先般、歴史的にも永劫に記録されるでありましょう有意義旦つ厳粛な上座部得度式に随喜させて頂き、小生にとっても生涯忘れることのできない感激で胸がいっぱいになりました。

黒田老師の燃えるが如き求道心と倦むことなき大衆教化の御浄行とが、日本国という狭き領域を超え、文化の相違や民族、言語などの障碍をも超克してグローバルに評価され、精神不在の日本の経済発展に一つの大きな精神的礎を構築するものとの期待で感慨無量なるものがあります。

比の度、態々中外日報掲載の得度式の詳報の記事を御恵送頂き、小生の仕事を手伝ってくれている大学院生や台湾からの留学生達にも回覧し、その意義ある儀式について説明いたしました。老師の留学僧派遣の御事業は既に内外各方面から高い評価を得ておられますから、今更小生如きが縷々駄弁を弄すべきではありませんが今後益々充実しその実をあげられますよう哀心より祈念申し上げる次第でございます。

横浜市緑区福田　孝雄

桜が散り桃があたり一面を紅に色どり信州は今春酣です。

このたびの永平寺の参籠法要に際しかずかずの尊いご配慮を賜わり心から御礼申しあげます。

ありがとうございました。

生涯において二度とない好因縁を結ばせていただいたことを参加者一同心から感謝しています。黒田様のご配慮により法母庵友の会員が多数参

加させていただき、あのような厳かな法要に列席させていただいたことを、そして亡き奥田正造先生を心からお偲びできたことをこのうえもない喜びと心から感謝申しあげます。殊に私ども夫婦が破格のおもてなしを頂き先祖代々のご供養をいただいたことはもったいない有難いことでございました。

この好因縁を基盤にいよいよ道のために精進いたす所存でございます。どうもありがとうございました。

長野県　田中　清

留学僧派遣の趣意書『成寿』等お送り下さいまして誠にありがとうございました。

宗門が今日も一万五千ケ寺と言い得るほど盛大となった、最も重要な点は、僧を生み出す能力があったからであると日頃より思っております。宗門は僧を生み出す能力、組織、伝統が他宗よりも優れて居たと思います。寺は造らなくても、僧を造れば寺は建つのです。布教も、育った僧が各々に布教するのです。ここに宗門の急所があると思います。宗門が宗門を超えて、自・他ともに育って行くそういう意味でも、留学僧派遣育英会は素晴しいと思います。と同時にこの様なことをするということは宗門の中では、組織的にも伝統的にも心情的にもとてもむづかしいことでした。それをあえてするという勇気に敬意を表します。小生は小心者で実行力は全然ありませんが、本当に自分がしなければならない一番大事なこと、するべきであると思うことを勇気を持って実現して行きたいと思っております。その為には、すぐれたことをして居られる方に出合い、見聞し、互いに觸発されることにより、非常な励ましと勇気を与えられる思いがします。どうか今後ともよろしく、ご教示下さいます様お願致します。

神戸市　能勢　隆之

過日は参上いたしまして、大変お世話になりました。

タイの得度式を勉強させていただけるとのことで、楽しみにしておりました。小生はタイ国の安居の経験がなく、とても興味深いものでした。特にお子さん達のタイ語による会話で式が進行し、四人のタイの言葉の何ともいわれぬハーモニーが耳の奥に残っています。土産の袋の中に解説のテキストが入っていまして、寺に帰ってから気がつきました。テキストを持って式に参列していたらと、あとから気がつきました。

長時間四人のお子さんもよく頑張られまして、準備がさぞ大変だったのではと思います。黒田先輩のさすがの指導力であると思います。我が子

にあれだけの指導が小生に出来るかと云われますと自信がありません。小生現在、全曹青の本部役員として出向しています。石附先輩が大OBになりますが、全曹青では同封のパンフレットの様に奈良で千僧法要を催します。全曹青は足腰の弱い団体ですので軌道に乗るまでは大変でした。何とか全国から千名の青年僧が結集する目鼻が付きました。この催しを後世に伝えたいとタイムカプセルの中にハガキを入れて、五十年後にお手もとへ返信させようという案があり、それが白いパンフレットです。是非お子様に、ご両親のメッセージを書いてあげて下さい。

私達は、子供や孫への心の中の種蒔きであると思っています。この費用はすでに入金してありますので、送金の必要はありません。ただ切手だけはお貼り下さい。青龍寺のお檀家にすすめましたら皆様に喜ばれました。「夢」があっていいねとおっしゃいます。アパートに住んでいる人は、お寺気付けに返信を書いておきますと、子供の代に、その手紙を持って年回供養に行くと話の輪が広まります。是非お子さん達にご両親の伝言をお書き下さい。

善光寺様に顔を出しますと、いつも勇気づけられます。いれも何故だろうと思います。それは方丈様の慈であり、人を引きつける力であり、善光寺様のにぎわいであり、善光寺様の生きたお寺としての機能であろうと思います。

海外留学僧に勉強の機会をとの大きな希望の星が、益々光り輝くことを祈念しております。

今後ともよろしくご指導を賜りますようにお願いいたします。皆様のご健勝をお祈り申し上げます。　合掌

滋賀県　桂川　道雄

拝啓、親愛なる武志老師。私はデビット・チャーリーです。覚えていらっしゃいますか。

二十年前にサンフランシスコ禅センターの学生でした。貴方とは、お兄さんの前角老師の禅堂でお会い致しました。随分前の事ですから、お忘れのことと思いますが、御一緒に、ロスから、ビッグサーまでヒッチハイクをしてビックサーで共に寒い夜を野宿して過ごしたことは想い出して戴けると思います。あの時は、私の手違いで御苦労をお掛け致し申し訳ありませんでした。

翌日、タサハラ禅心寺まで行きました。もう、本当に昔のことになりますね。

今、私は、九州熊本の聖護寺に居ります。ここは、近いうちに、国際禅道場となる予定で、今、ミネアポリスから片桐大恩老師が来て、詰めて居ります。私は片桐老師を訪ねて、

アメリカから出て来て、一ケ月の予定で、聖護寺で修行しています。そして、ここ聖護寺で瑞鷹寺僧堂から派遣されて居る、栃木県の西田正法さんに会い、武志老師の話しが出て、是非お会いしたいと思い、西田に代筆をしてもらって居ます。私の予定は、まだはっきりしていませんが、多分、今月末か六月初旬に東京の方に行くつもりです。御多忙中とは存じますが、お会いして頂けるでしょうか。御都合、御一報願いたく、お便り申し上げました。

デビット・チャリー

先日は、結婚式の際皆様からいろいろとお気づかいいただきましてありがとうございました。おかげさまで、引出物のお皿も好評のようでしたので、私もほっとしております。さて、このたび、御本を御送りいただきまして誠におりがとうございました。

武志様の御活躍の記事を読ませていただき、私もより一層がんばらねば、と思いました。私の仕事も永遠に追究しつづけなければならないので、常に向上心を持ちつづけるのは、たいへんですが、がんばっていきたいと思います。

今後とも何かとお世話にあることがあると思いますが、よろしくお願い申しあげます。

加古川市　大島英一郎

比の度春号御恵送下さいまして有難うございました。

益々の御発展お目出度うございます。方丈様の「十五年の軌跡とその成果」を拝読し立派な人格と行動力には敬服致しました。そして海外留学僧派遣育英会の設立等で成果を上げられ社会に貢献なされ慶賀に耐えません。又佐藤俊明老師の「お不動様のお話」は感銘深く読ませて頂きました。今後何回も熟読させて頂き精進させて頂きます。本当に有難うございました。

貴山成寿の益々の御隆盛念じ上げます。

大阪府松原市　佐田　依枝

拝啓、厳しかった冬の怒りもようやく薄れてきました今日此の頃です。大圓方丈様益々御清祥のことお慶び申し上げます。先日は、「成寿」第九号御恵送下さいまして厚くお礼申し上げます。

「新しい教化路線を求めて」を拝読させていただき大圓方丈様の十五年の軌跡とその成果は大変なことであったでしょう。文章の中にその姿が滲み出ています。

大圓方丈様の人徳です。

小生も少しでも功徳をつみたいと思います。宗祖と釈尊は一体である。

すばらしい言葉です。
どうかお身体にご自愛して下さることを祈念すると共に山門の繁栄と「成寿」の益々の発展を念じ上げます。

東京都葛飾区　林　博明

只今は成寿第九巻御恵贈賜り有難く厚く御礼申します。毎回大圓老師御活躍の御様子にて御事業益々御発展あられ手にとるごとく御分り致します様に思われます。これも我々衆生を済度の御気持とその発露と存じます。
佐藤俊明老師の三歳の童児も又理解出来るような暖く深い御話をたのしみにて拝読させて頂きました。
暖かく桜も咲く頃が近づきます。広く世界一丸輪の如く手をたづさえる時最高の理想の御事業の御発展心より御祈り申します。

井高　帰山

御変り御座いませんか、成寿春季号を有難う御座いました。
イッキに読み益々御繁盛文化面への発展蔭ながら御悦論申し上げます。
敢えて苦言雑言を申しますれば、先生はもう忘れてしまったのでせうが松原泰道さんの著した小冊子を小生買っていただき其の中に印度・セイロンビルマ、タイに伝はるパーリ語の佛教教典よりオトギ話の話が有りましたが観音様兄弟が補陀落山に流され（華厳経）る話。方丈さんと一諸に居た当時より早や十余年経った今でも忘れないではっきり記憶して居ります。非常に感銘を受け宗教の真ズイに触れた思ひでした。出来ますれば佛教発ショウの地だから必ずオトギ話が沢山あるはず。是非貴重な紙面でせうが半頁位さいて書いて教えていただき度い

横浜市神奈川区　伏見　暲

成寿春号を御恵送下さいまして本当に有難う御座居ました。昨年十月再度の入院で近頃やうやく視力も回復して参りましたので、折を見ては拝読させて戴いて居ります。昨年は丁度、嫁、そして孫と一緒に四月八日にお邪魔させて戴き、釈迦堂にて「あま茶」をかけさせて戴き、又来年もと思って居りましたのに、残念です。でもきっと、再度の機会と心に念じつつ療養に専念して居りますので御安心下さい、少々では御座居ますが、御仏前にお供え下さればありがたいと思ひ、ゆり根を送ります。時節柄、御身お大切に、奥様にもよろしく申上げて下さいませ。

北海道亀田郡　西川　栄治

海外留学僧募集について

目　的　大学卒業相当以上の学力を有し、仏教を修学する者のうち、学業操行ともに優秀にして心身堅固なものを海外に派遣し、仏教の興隆、国家社会の進運に寄与し得る優秀な人材を育成することを目的とする。

派遣先　アメリカ――ロスアンゼルス禅センター、タイ――ワット・パクナム

派遣期間　一年間とするも場合により延長するも可

給　費　派遣先までの往復旅費及び滞在に要する必要経費を支給する

募集人員　2～3名

提出書類　(1)　保証人と連署した願書　(2)　卒業証明書（写し）　(3)　履歴書　(4)　卒業証明書　(5)　推薦書　(6)　論文

提出レポート

一、アメリカ希望の場合

禅の国際化と私の役割　(2)　二一世紀の仏教と私の役割

二、タイ希望の場合

(1)タイの仏教に学びたいこと　(2)　未来社会の仏教と私の役割

希望国の中からいずれか一題を選ぶこと、枚数はいずれも四〇〇字詰原稿用紙五～一〇枚

善光寺海外留学僧派遣育英会事務局

Theravāda Tokudoshiki Now Over

The Buddhism in Japan is branched into many sects, and they seem to have something incompatible with each other unlike what they preach. Which is the true teaching of Buddha, was honest question I had when I first came in contact with the Buddhlsm in my youth. I then founded my religious activities on the fundamental belief of "Return to Buddha through the founder of the Sect". This fundamental belief of mine underlies all my subsequent activities, including my pilgrimage to the Buddhiet relics in India immediately after completion of my training at the Headtemple, my further training of myself for more than one year in Thailand on my way home from India, the naming of the building constructed in 1982 the 『"Buddha Hall"instead of calling it a "Hondo" in a conventional way』 and the sending of competent priests to overseas countries for study irrespective of their sects.

The Wat paknam is a temple (Paknam Temple) in Thailand where I trained myself when I was young and where Japanese priests have studied under the Zenkoji scholarship. When I visited there last year, the chief priest of the temple expres-

sed me his strong desire of holding a tokudoshiki (a ceremony of entrance to the Buddhist priesthood) in Japan and asked my cooparation for the reslization of it with the view to promote the interchange of Buddhism between Japan and Tailand. This was realized in the form of the "Tokudoshiki" of my four sons, held on April 2.

In the magazine "Religion and Present Age" , Dr. Ryujin Azuma commented on the Tokudoshiki as follows:

"The fact that a Thai high priest came over to Japan and gave Buddhist commandments to the Japanese is probably comparable, in the Buddhist history in Japan, only to the commandmento given by the Chinese high priest, Rev. Ganjin, to the Japanese priests as he built an ordination sanctuary in the Todaiji Temple. This event has added a new page to the history of Buddhism in both Japan and Thailand.

In the depth of my mind, I am determined to further devote myself to Buddhism so that I can be a foundation stone for the promotion of the interchange between Mahayanist Buddhism and Theravādo Buddhism under the protection of Buddha.

英訳甘露門とその受用について

河　内　義　宣

前回報告したとおり、アメリカ・ニューヨークのグレイストン・セミナリー（Zen Community of New York）において、私達が毎日晩課に、そして特に施餓鬼法要におつとめしている甘露門が英訳され、晩課に読誦されており、坐禅修行のテキストとして使われております。以下その英訳の紹介とその受用の仕方について述べてみたいと思います。

甘露門

GATE OF SWEET NECTAR

奉請三宝

Invitation for the Manifestation of the Three Treasures

(Everyone in Gassho, repeat three times)

(Bow after each cycle of vows)

南無十方仏　南無十方法　南無十方僧

南無本師釈迦牟尼仏　南無大慈大悲救苦観世音菩薩　南無啓教阿難尊者

BEING ONE WITH THE BUDDHAS IN THE TEN DIRECTIONS

BEING ONE WITH THE DHARMA IN THE TEN DIREC-

TIONS.

BEING ONE WITH THE SANGHA IN THE TEN DIRECTIONS

BEING ONE WITH ALL FORMLESS FORMS THROUGHOUT SPACE AND TIME

BEING ONE WITH THE GREAT MANJUSRI BODHISATTVAS,

BEING ONE WITH THE GREAT COMPASSIONATE, AVALOKITESVARA BODHISATTVAS.

BEING ONE WITH OUR ORGINAL TEACHER, SHAKYAMUNI BUDDHA

BEING ONE WITH OUR LINEAGE FROM MAHAKASYAPA SONJA

(Bow)

招請発願　是諸衆等(弟子某甲)

Supplication for the Raising of the Bodhi Mind

発心して一器の浄食を奉持して普く十方　窮尽虚空周遍法界　微塵刹中　所有国土の一切の餓鬼に施す　先亡久遠　山川地主乃至曠野の諸鬼神等　請う来って此に集まれ　我今悲愍して　普く汝に食を施す

Vow to feed the hungry spirits

Raising the Bodhi Mind, the supreme meal is offered to all the hugry spirits in the ten directions throughout space and time, extending outwardly and inwardly, filling the smallest particle to the largest space.

All you hungry spirits in the ten directions, please come and gather here.

Sharing your distress, I wish to offre you this food and hope it resolves your thirsts and hungers.

願くは汝各々　我此食を受けて　転じ持って尽虚空界の諸仏及聖一切の有情に供養して　汝と有情と　普く皆飽満せんことを

Prayer of food sharing.

I pray that all of you receiving this offering will return its merits to all the Buddhas and to all creations throughout space and time: and as you do so, they all will be thoroughly satisfied.

亦願くは汝が身　此の咒食に乗じて　苦を離れて解脱し　天に生じて楽を受け　十方の浄土も　心に随って遊往し　菩提心を発し　菩提道を行じ　当来に作仏して　永く退転なく　前に道を得る者は誓って相度脱せんことを

Prayer for raising the Bodhi Mind

I further pray that in receiving this meal all your sufferings will be eliminated, that you will be liberated, so that, being

joyously reborn, you will freely play in the fields of the Pure Land throughout all space and time.

Raising the Bodhi Mind and practising the Enlightened Way, you become the future Buddhas without any further regress.

Those who realize the way first, please be sure to vow to liberate everyone else throughout all space and time.

又願くは汝等　昼夜恒常に　我を擁護して　我が所願を満ぜんことを

Prayer for fulfilling these vows.

I further beseech you to protect me day and night and encourage me to fulfill my vows.

願くは此食を施す　所生の功徳　普く以て法界の有情に廻施して　諸の有情と平等共有ならん　諸の有情と共に　同じく此福を以て　真如法界無上菩提一切智智に回向して

Prayer for transferring the merit of this practice.

In offering you this meal,Ipray that you give the merits of this offering equally to all the creations in the Dharma worlds.

Together with all creations, I transfer the merits of this offering to the Dharma world of True Reality, to unsurpassable enligtenment, and to all the Buddha wisdoms.

願くは速に成仏して　余果を招くこと勿らん　法界の含識願くは此法に乗じて　疾く成仏することを得ん

Repeated prayer to attain the Enlightened Way.

I earnestly pray that you will accomplish the Buddha way and invite misery and suffering no longer.

May all creations in the Dharma world being suffused with this dharma, swiftly accomplish the Buddha Way together.

雲集鬼神招請陀羅尼

曩謨　歩布哩　迦哩多哩　怛他孽多也

Dharani for the Invitation for the Manifestation of all the Gods and Demons

NŌ BŌ BO HO RI GYA RI TA RI TA TĀ GYA TA YA

(Being one with the Unattached Tathagata.)

破地獄門開咽喉陀羅尼

唵歩布帝哩　迦多哩　怛他孽多也

Dharani of Hell Crushing and Hungry Spirit Throat Opening

ŌM BO HO TĒI RI GYA TA RI TA TĀ GYA TA YA

(Being one with the Boundless Tathagata.)

無量威徳自在光明加持飲食陀羅尼

曩莫　薩嚩　恒佗孽多　嚩嚕吉帝　唵三婆羅　三婆羅吽

NŌ MAKU SA RA BA TA TĀ GYA TA BARO KI TĒI ŌM

SĀN BA RA SĀN BA RA ŪN

Dharani of Expansion Prayer upon the Food and Drinks

(Bing one with all Tathagatas and Avalokitesvara Bodhisattva, Please nourish, nourish.)

蒙甘露法味陀羅尼

曩莫　蘇嚕頗也　恒佗孽多也　恒儞也佗

唵　蘇嚕蘇嚕　鉢羅蘇嚕　鉢羅蘇嚕　婆婆賀

Dharani upon the Dharma Taste of the Sweet Nectar

NŌ MAKU SO RO BA YA TA TĀ GAY TA YA TA NYA TA ŌM

SO RO SO RO HA RA SO RO HA RA SO RO SO WA KA

(Being one with tha Inconceivable Body Tathagata, let the nectar of Dharma spring forth.)

毘盧舎那一字心水輪観陀羅尼

曩莫　三満多　没馱南鑁

Dharani of feeding all the Hungry Spirits

(Repeat 21 times or until Doan signals the end of the repetition.)

Repeat 14 times: NŌ MAKU SĀN MĀN DA BO TA NĀN BĀN

7 times: Being One with All Buddhas,

and turning the water-wheel of compassion.

五如来宝号招請陀羅尼

Dharanis for Inviting the Buddhas of the Five Families

(Ryoban in Gassho , everyone repeat three times)南無多宝如来　曩謨　薄伽筏帝　鉢囉歩多　阿囉怛曩也　怛他孽多也　除慳貪業福智円満

Invitation for the Manifestation of the Buddhas in the Padma Family

Twice: NA MU TA HŌ NYO RĀI NŌ BO BA GYA BA TEĪ HA RA BO TA A RA TĀN NŌ YA TAGYA TA YA JO KĒN TŌN GŌ FU KU CHI ĒN MĀN

Once: Being one with all Buddhas in the Inter-Faith Spheres, removing all greed, wealth and wisdom are in abundance.

南無妙色身如来　曩謨　薄伽筏帝　蘇嚕波耶　怛佗孽多也　破醜陋形円満相好

Invitation for the Manifestasion of the Buddhas in the Ratna Family

Twice: NA MU MYŌ SHIKI SHĪN NYO RAĪ NŌ BO BA GYA BA TEĪ SO RO BA YA TA TĀ GYA TA YA HA SHŪ RŌ GYŌ EN MĀN SŌ KŌ

once:Bing one with all Buddhas in the Livelifood Spheres, crushing ugliness, perfect appearance of both body and mind manifests.

南無甘露王如来　曩薄伽筏帝　阿蜜嘌帝　阿羅惹耶　怛他孽他也

灌法身心令受快楽

Invitation for the Manifestation of the Buddhas in the Buddha Family

Twice: NA MU KĀN RO Ō NYO RAĪ NŌ BO BA GYA BA TEĪ A MI RI TEĪ A RĀN JA YA TA TĀ GYA TA YA KĀN PŌ SHĪNJI N RYŌ JU KE RA KU

Once: Being one with all Buddhas in the Buddha Spheres bodies are filled with boundless Dharma and existence is enjoyed.

南無広博身如来　曩謨　婆伽筏帝　尾布邏囉　怛囉耶　怛佗孽多也

咽喉広大飲食充飽

Invitation for the Manifestation of the Buddhas in the Vajra Family

Twice: NA MU KŌ HAKU SHĪN NYO RAĪ NŌ BO BA GYA BA TEĪ BI HO RA GYA TA RA YA TA TĀ GYA TA YA

ĪN KŌ KŌ DAĪ OÑ JIKI JŪ BO

Once: Being one with all Buddhas in the study Spheres, throats are opened, eating and drinking fully satisfy.

南無離怖畏如来　曩謨　婆伽筏帝　阿婆演　迦羅耶　怛佗孽多耶

恐怖悉除離餓鬼趣

Invitation for the Manifestation of the Buddhas in the Karma Family

TwiceNA MU RI FU Ī NYO RAĪ NŌ BO BA GYA BA TEĪ A BA ĒN GYA RA YA TA TĀ GYA TA YA KŪ SHIT-SU JO RI GA KI SHU

Once: Being one with all Buddhas in the Social Spheres, all the sufferings of the Hungry Spirits are eliminated.

発菩提心陀羅尼

唵　冐地即多　母怛　波多野迷

Dharani for Raising the Bodhi Mind

(Repeat after officiant, three times)

Twice:ŌM BŌ JI SHĪ TA BO DA HA DA YA MI

Once: Now I have raised the Bodhi Mind.

授菩薩三摩耶戒陀羅尼

唵　三昧耶　薩怛鑁

Dharani of Giving the Bodhisattva Samadhi Precepts

(Repeat after officiant, three times)

Twice: ŌM SĀN MA YA SA TO BĀN

Once:I am the Buddhas and they are me.

Dai Hō Rō Kakū Zen Jū Hi Mitsu Kon Pon Darani

NŌ MA KU SA RA BA TA TĀ GYA TA NĀN ŌM BI HO

RA GYA RA BEI MANIHA RA BEI TA TA TA NI TA SHA NI MANI MANI SO HA RA BEĪ BI MA REĪ SHA GYA RA GĒN BI REĪ ŪN NŪN JĪN BA RA JĪN BA RA BO DA BI RO KI TEĪ KU GI YA CHI SHŪ TA GYA RA BEĪ SO WA KA OM̄ MA NI BA JI RĒI ŪN OM̄ MANIDA REĪ ŪN BĀ TA

Sho Butsu ko Myo Shin Gon Kan Cho Darani

ŌM A BO GYA BEĪ RO SHA NŌ MA KA BO DA RA MA NI HĀN DO MA JĪN BA RA HA RA BA RI TA YA ŪN

回向偈

Gatha for Transference of Merit

(Everyone in Gassho)

以此修行衆善根　報答父母劬労徳

By this practice I now wish

To show my appreciation to

Parents, teachers, all creations

For so much done on my behalf.

存者福楽寿無窮　亡者離苦生安養

May those who practice in this sphere

continue to enliven, to enrich, to enjoy.

May those who have gone be released

From suffering and nourish peacefulness.

四恩三有諸含識　三途八難苦衆生

俱蒙悔過洗瑕疵

May all creations in the three worlds

Receive the fourfold benefactions,

May those suffering on the three paths

And tormented by the eight difficulties come to atonement and be cleansed of all their ills.

尽出輪回生浄土

May they be liberated from samsara

And arise in the Pure Land together.

以上、本文と英文を対象して掲載しましたが、本文にそって、ZCNY における受用の仕方のいくつかのポイントを述べてみます。

第一は奉請三宝でありますが、いったいどうしたら三宝を請することができるのかということであります。日本では一搬的には最初に迎請のための鼓鉢が鳴らされて南無十方仏以下が読誦されますが、ZCNY ではそこのところがもう一つつっこんだ理解がなされていると思います。南無という言葉は普通帰依とか帰命と漢訳されていることは周知のとおりです。英語に翻訳された場合 Take refuge in とされるのが普通ですが、ここでは Being one with となっています。避難所を……にとるとか、依り所を……にもとめるという考えの中には仏と自己を別々のものとしているわけですが、Being

one with と唱えることによって三宝が自己と一つである、あるいは三宝と一つになる、さらにお唱えの中に自己を忘じて三宝そのものになることによって三宝を招することができるのであるという理解がこうした訳になっているわけで、禅門におけるお唱はこのようでなくてはならないと思います。

四行目に出てくる Being one with all the formless forms throughout space and time は本文にないことはいうまでもありません。世界の宗教の中にはユダヤ教とかイスラム教などのように形あるものを祀らない宗教があるわけで、彼らは偶像崇拝は邪教とみなしているわけで、彼らにも仏教が抵抗なく受けいれられるようにという配慮があるわけです。

次に阿難尊者が抜かれて文殊菩薩と迦葉尊者が取り入れられておりますが、仏さまの智慧（般若の智慧）の面が非常に重要視されていることの現れであると解すことができます。またアメリカにおける禅の歴史が浅いだけに歴史、伝統、法系に対する関心の強さ、法に対する尊厳性の強調、そういったことが迦葉尊者が出てくる所由です。

第二のポイントは「招請発願」文であります。ここに七願が説かれているのは周知のとおりであります。ここで私達が確認しなければならないことは「菩提心」とは何かということでありましょう。道元禅師は『学道用心集』に「世間の生滅無常を観ずる心を菩提心

と名く」と言っておりますが、一方『正法眼藏・発菩提心』には「菩提心を発すというは己れ未だ度らざる先に一切衆生を度さんと発願し営むなり」とか、「おほよそ菩提心はいかがして一切衆生をして菩提心をおこさしめ仏道に引導せましと、ひまなく三業にいとなむなり、いたずらに世間の欲楽をあたふるを利益衆生とするにはあらず」とも示されています。『甘露門』は餓鬼を救済することが眼目であり、五菓百味の飲食を供えることも大切でありますが、一番大切なことは、私共が先ず菩提心を発すということでなければならなりません。従ってグラスマン先生は法話の中で次のように述べられています。

One of the vows is to feed all of the hungry spirits.

In "Raising the Bodhi-mind"we offer this best meal. Our first vow is telling us that the food is the "Raising of the Bodhi-mind".

そして更に

The next bow is to take on all the sufferinqs of the hungry spirits (and we are the hungry spirits). In so doing, we can raise the vow to feed, Again it is not to help others out of their pain but rather for us to take on their pain.

とも言われております。アメリカで多くの人達がまさに精神的飢餓状態にあり、まさにそのことの自覚の故にさまざまな宗教が広がっているわけですが、三界唯一心とか自他一如という教えが自己即仏ということと同時に自己即餓鬼ということもあって、向上門、向下

門が一つになって自から菩提心が発ってくることになります。また発さねばならないわけであります。従って儀式の中でも「発菩提心陀羅尼・オンボージシッタボダハダヤミ」Now I have raised the Bodhi-mind が特に強調されくりかえし唱えられることになるのであります。そして次に「授菩薩三昧耶戒陀羅尼」(オンサンマヤサトバン・I am the Buddhas and They are me が唱えられます。三昧耶戒は真言密教で云われることで、達摩大師の『一心戒文』あるいは道元禅師の『教授戒文』の如く、いわゆる仏性戒であり、この陀羅尼を唱えることによって授戒が成立することになり、ここに『甘露門』を禅門で活用している一番大きな意味があるといわねばなりません。

ちなみに『正法眼藏』帰依三宝に仏が餓竜を救った因縁を説かれて

「ほとけみづから諸龍を救済しましますに餘術なし、ただ三歸をさづけましまし…」

と説かれていること銘記しておかねばならないと思います。

さて最後に五如来ですが真言密教で説かれている五仏に対応していることは言をまちませんが、その機能あるいは性格は必らずしも一致しないようです。簡単に図示しますと下記のようになります。

多宝如来—宝生—life—Interfaith Spheres

妙色心来—阿閦—wealth—livelifood 〃

甘露王来—阿弥陀—love—Buddha Sphere

広博身来—大日—experience—Study Sphere

離怖畏来—釈迦—Action—Social Sphere

儀式の中では、この五如来の所で両班に立つ僧（Z、C、N、Yではすべてのメンバー）は焼香に出るわけですが、先生は各メンバーにどの仏として焼香するのか考えるように指導されたことがありました。密教ではマンダラにすべての諸仏菩薩が配されているように、すべての人達も五仏のうちのどれかに属しているという考えがあり、ZCNYにおけるすべてのメンバーは五つのグループに分けられたどれかに所属して活動するようにすすめられています。その中でおもしろいのは、最初の多宝如来がInterfaith Spheresにおける仏として理解され、そのグループに属した人達はお互いの宗教の理解と融和のための学問、活動をすることを考えます。前にも少しふれましたがアメリカは人種の坩堝といわれる程、多種多様な人達住んでいる国であり、従って宗教も多種多様であります。ZCNYのメンバーもすべての人達が仏教徒になっているということでなく禅を学ぶとともに、一方自分の宗教を持っている人達も多いわけで、お互いに理解しあい融和してゆくことが非常に大であるわけです。そしてそれをなしうる根拠として一切諸法は空であるということ、あるいは真如の顕現であるという理解があるわけです。従ってどのような宗教も空、真如、ダルマの中に包括できないわけはないというこ

とになります。

さて次に第五仏離怖畏如来のグループをSecial Action Groupとして性格づけて、それに所属するメンバーを中心に社会奉仕活動がなされて今、市当局やキリスト教会とも協力して、その人達のための宿泊施設、作業を教える仕事、無料食堂の経営等、大きなプロジェクトが進行しつつあります。

このようにして、ZCNYにおける修行、活動が『甘露門』によって行われているということ。他山の石として大いに学ぶべき点があると思った次第です。

①鬼神は本来死霊をさす言葉であるからGods and Demonsは明らかにまちがいである。

②坂内師の『ダラニの話』によると「おお汝は(われと)平等一味なり」とある。そして「仏を我に入れ、我を仏に入れる(入我我入)。これが菩薩三昧耶戒であります。」と言っている。英訳がより主体的、体験的であることがみてとれる。

③大宝桜閣善秘密ダラニ、光明真言は未訳

④例えば『六祖壇経』に

「善知識をして自らの三身仏を見せしめん自らの色身において清浄法身仏に帰依す。自らの色身において千百億化身仏に帰依す。自らの色身において当来圓満報身仏に帰依す……こ

の三身は自からの法性にあり……もし仏陀に帰依するというならその仏陀はどこにいらっしゃるのか。仏陀に会えなければ帰依しようがないであろう。……経典には「自から仏に帰依する」といっているだけで「他の仏に帰依する」といっていない。自己の本性がとりもどされねば、よりどころはないのである。」

とあります。

—『世界の名著・禅語録』—

筆者紹介
河内　義宣

第2回海外留学僧としてアメリカに派遣
本年3月晋山結成を終え、現在釣学院住職

編集後記

▼今回は〝タイ法式による得度式〟を特集いたしました。

日本では異例にしてはじめての上座得度式として、各方面から注目されましたが、これは留学僧を受け入れてくださっておられるタイ・ワット・パクナムのプラ・タム・パンヤー・ボディ師の強い要望があって実現したことでした。タイ仏教の息吹きを、是非日本にもさわやかな風として紹介したいという尊師の願いは、こうして実を結んだわけですが、これはとりもなおさず日本の仏教界全体への願いでもありましょう。

プライベートな儀式としての行持ではありましたが、今後更に各国の仏教とのひたむきな交流がすすめられるためのいしづえとなるであろうと思います。

▼来年は、開創満二十周年に正当します。これを記念する各種の事業が計画され、只今進展中でありますが、檀徒の皆様方の御協賛を仰ぎ、心からなる浄財の御喜捨をお願いいたしております。何とぞ御協力のほどお願い申し上げます。

▼今年もまた梅雨の季節が巡ってまいりました。降り続く雨に、心も体もふさがれたようなうっとうしい思いに閉ざされるのかと思うと、重苦しい気分になりますが、お釈迦さまが考えられた〝雨安居（うあんご）〟ということを思い出してみてはいかがでしょうか。インドの雨期は日本の梅雨のようなしっとりとした風情とは程遠いすさまじいものですが、この時期に外出を禁じ、勉学と仏法精進のための修行期間を設けられました。

私たちもまた、内省のいい折を与えられたと感謝して、しみじみと梅雨とつきあいたいと思います。

▼夏の日盛りに赤い花をつける丈高い草を、〝お盆花〟と呼んだ記憶がありますが、お盆飾りの仏壇に毎年生けられる花でした。年に一度帰っていらっしゃるご先祖を、今年はどんな花で迎えましょうか。（小熊）

成寿　第十号
昭和六三年六月二十五日発行
発行所　成寿山善光寺
横浜市港南区日野町一六〇四
電話　〇四五（八四五）一三七一
印刷所　神奈川新聞社出版局

妙音かんのん

合掌し
ただに祈る
何も求めず
見上ぐれば微笑し給う
おろかにも祈りコトバ知らず
ひたすらに
大いなる胸に抱かるるを願う
妙音観世音
人と生れて
み姿を拝むよろこび
妙なるみ声
流れ来たりて
今
会いたてまつる

「観世音声を限りに」より　遠藤太禅

横浜善光寺